

はくさんじんじゃほんでん つたりむなふだ まい  
**白山神社本殿 附棟札4枚**



- ・ 指定日 昭和33年5月14日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1棟 附4枚
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町

[地図表](#) 戻る

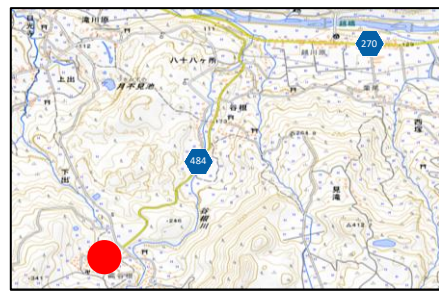


棟札や墨書から永正12年（1515）に建立され、寛永、貞享、元禄、文化、明治、大正、昭和と修理を経ています。前面に一間の向拝こうはいをつけた三間社流造で、屋根は柿葺こけらぶき、岩陰いわかげに建つことから、東側の軒が短く、縁を省いた非対称形で、木割きわり・繰型くりがたなどの細部の形式は室町時代の特色をよく示し、和様形式を主体としながらも肘木ひじきなど組物には唐様形式からようを用いています。身舎みやの円柱、その上部の組物は造営当初のもので、寛永年間（1624～1643）の修理で向拝の海老虹梁えびこうりょうがつけ加えられています。

なお永正12年、文禄5年（1596）、寛永8年（1631）、貞享5年（1688）の棟札4枚が附資料となっています。

※海老虹梁えびこうりょう：海老のように弓形に湾曲した、虹梁の一種

やまぐち けじゅうたく つがたり ふ しん かんけい もんじょ さつ  
山口家住宅 附普請関係文書 2冊



- ・ 指定日 昭和52年1月28日
- ・ 所在地 下出
- ・ 員数 1棟 附2冊
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図](#)  
[表](#) 戻る



代々庄屋を勤めたと伝えられる山口家住宅は建築当時の普請帳によると安永8年（1779）に建てられ、寄棟造、茅葺（現在は鉄板で覆われています）で、四面に鉄板葺の庇や突出部を後設しています。太い柱はほぼ一間ごとに立ち、平面は土間の他に四室が田の字型に並ぶ整形四間取りで、そのうち上手前が12畳敷の座敷となり、二間の大床と仏壇を設けています。構造は堅固で床は約90cmと高く、雪国民家の特徴をよく表し、梁組が四方を鉦梁とするなど、地方的特色を示しています。

※普請帳：家屋を建築する際に費用や作業内容を記録した帳面

いとうけじゅうたく  
伊藤家住宅

- ・ 指定日 平成30年12月25日
- ・ 所在地 鬼舞
- ・ 員数 6棟 附5棟 1冊 土地
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸～明治

[地図表](#) 戻る



伊藤家は、江戸後期から明治にかけて栄えた県内屈指の廻船主で、明治20年（1887）の類焼後に主屋などが再建されました。住宅は広い敷地中央に主屋が北面して建ち、その北西に座敷の蔵、米蔵・味噌蔵、米蔵の3棟の土蔵を鍵の手状に配し、更に塀を延ばして東面に門を設けています。主屋は木造2階建、切妻造、棧瓦葺で外壁を下見板張としています。

平面形式や細部に上越地方の近世民家の特徴を備え、接客部や台所、座敷飾に良材を用い優れた意匠の室内造作、2階に多数設けられた居室などに、近代的発展の様相を示しています。敷地内には、焼失を免れた江戸末期の土蔵などの附属建物も多数保存され、明治期までに整えられた屋敷構えを良好に伝えています。

地方的特色を備えた、大規模で上質な近代住宅として高い価値を有し、当地の歴史的的特色でもある江戸後期から明治にかけての廻船による隆盛を今に伝えています。



こいでさんりんぞう てつげんいっさいきょう  
小出山輪蔵および鉄眼一切経



- ・ 指定日 昭和47年5月12日
- ・ 所在地 柱道
- ・ 員数 1棟 2,236冊
- ・ 所有者 小出山輪蔵及び經典保存会
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

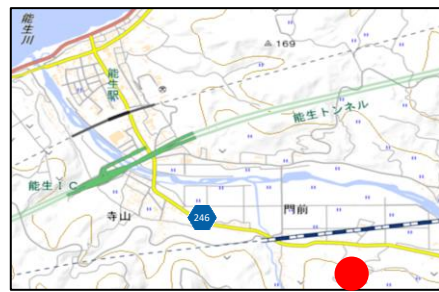
[地図表](#) 戻る



小出山出生寺の境内に建つ瓦葺、土蔵造の法宝堂（覆堂）の内部にあるこの輪蔵は安政年間（1854～1859）の建造とされます。経本等を入れる回転式の経蔵のことを輪蔵といい、小出山の場合は六角形をなし、正面は仏殿、他の五面は書架で、鉄眼版等の一切経が収納され、輪蔵を一回転させると一切経を全部読んだと同じ功德があるとされています。

黄檗鉄眼版一切経は、江戸時代前期に黄檗山万福寺の鉄眼が出版した経（教義）・律（規律）・論（理論）、その他にわたる一大仏教全集です。巻末の寄進者名などから、能生谷を中心に浄財を募って文化12年（1815）から明治13年（1880）の間に収蔵されたことがわかり、朱筆による書き込みもあり、各地から参集した修行僧の研鑽の姿が偲ばれます。

おぎ た し はか  
荻田氏墓



- ・ 指定日 昭和47年5月12日
- ・ 所在地 小見
- ・ 員数 3基
- ・ 高さ 3基とも247.5cm
- ・ 所有者 龍光寺
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



荻田氏は糸魚川城主や高田藩家老職を勤め戦国末期から江戸初期に、当地域の政治中枢を担った家柄です。能生谷<sup>おみ</sup>小見の龍光寺にある3基の五輪塔は、中央に龍光寺<sup>かいき</sup>開基といわれる2代目の孫十郎<sup>ながしげ</sup>長繁（後の<sup>しゅめ</sup>主馬）、左に3代目の孫十郎、右に4代目の<sup>はやと</sup>隼人のもので地輪の「地」の文字の両側に<sup>かいみょう</sup>戒名と没年月日が彫られています。

2代目の主馬は上杉謙信・景勝に仕え、天正7年（1579）の「御<sup>お</sup>館<sup>だて</sup>の乱」での功績により糸魚川<sup>じょうたい</sup>城代となりました。3代目の孫十郎は大阪夏の陣に加勢して功を挙げていますが、30代に亡くなっています。4代目の隼人は寛文5年（1665）の高田大地震により、同じく家老職の小栗<sup>まさたか</sup>正高と共に<sup>くら</sup>圧死<sup>あぶみ</sup>しています。

龍光寺には2代目主馬の肖像画や鞍、<sup>くら</sup>鐙<sup>あぶみ</sup>が寺宝として伝えられています。

しゅっしょうじ  
出生寺



- ・ 指定日 昭和50年1月18日
- ・ 所在地 柱道
- ・ 員数 1棟
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図](#)  
[表](#) 戻る



本堂は間口三間半、奥行四間で回廊がつき、茅葺の屋根は銅板で覆われています。棟札から宝暦12年（1762）5月の再建で、棟梁は相馬御風の祖、相馬重郎左衛門昌信まさのぶです。本尊十一面観音をはじめ多数の仏像が安置され、地域の人々からは「小出の観音さん」として親しまれています。

なお、弘長2年（1262）に、越後横道三十三観音の第七番礼所「小出山出生寺」と称号を定めました。

あまつじんじゃほんでん  
天津神社本殿



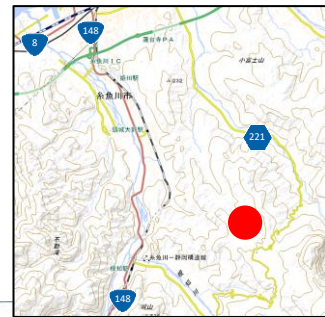
- ・ 指定日 平成3年3月26日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 1棟
- ・ 所有者 天津神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図](#)  
[表](#) 戻る



本殿は総檜造<sup>けやき</sup>で、完全な左右対称型をとります。屋根勾配は比較的緩やかで、建築構成上の手抜きもなく、彫刻紋様等の調和もよくとれ、高度な意匠<sup>いしょう</sup>を持った象徴性の高い神社本殿と評価されます。残っている10分の1の図面から寛政6年（1794）の建築で、棟梁は相馬御風の祖、相馬重郎左衛門昌信<sup>まさのぶ</sup>であったことがわかります。

まつざわ けじゅうたく  
松沢家住宅



- ・ 指定日 平成3年3月26日
- ・ 所在地 来海沢
- ・ 員数 1棟
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 明治

[地図](#)  
[表](#) 戻る



19世紀中期以降の建築と推定される木造二階建瓦葺の住宅で、間口十二間、奥行六間、建坪125坪の堂々たる建築物です。2度の増改築がなされていますが、当初の形が良く残っています。軸組は堅固で狂いは見受けられず、<sup>いしろう</sup>意匠や構造は変化に富んでいますが、なかでも軒先は、「<sup>せがいつくり</sup>船桡造」という内部から外部にせり出した<sup>はねぎ</sup>桔木で重い棟を支える構造となっています。明治初頭における農家建築の特徴をよくあらわしています。

のうはくさんじんじゃはいでん  
能生白山神社拝殿



- ・ 指定日 平成6年7月22日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1棟
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図表](#) 戻る



けたゆき 八間、はりま 梁間五間で屋根は入母屋造妻入の茅葺です。寛保年間（1741～1743）の火災により焼失したため、宝暦5年（1755）に再建されました。入口部と前室、後室に分割され、入口部と側回りは改造が多く、内部は当初の状態をよく残しています。意匠の中心は前室と後室の境に集中し、出組を用い、虹梁こうりょうを渡しています。構成は拝殿、舞殿まいでん・弊殿へいでんとしての機能をもち、大正年間（1912～1925）に西側一間が増築されています。

けんぽんそうふくししよみようじん こうぼうだいし が ぞう  
絹本双幅四所明神・弘法大師画像



左 四所明神  
右 弘法大師

- ・ 指定日 昭和48年3月26日
- ・ 所在地 清崎
- ・ 員数 2幅
- ・ 大きさ 2つとも縦101cm横43.7cm
- ・ 所有者 宝伝寺
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



四所明神と弘法大師を1対の双幅としたもので、箱書から高野山三宝院の所蔵品が、天明7年（1787）に神宮寺に贈られたようです。本格的な筆法で保存状態も良く、南北朝時代の制作とされる絵画双幅で、一の宮天津神社の境内に明治初期まで所在した神宮寺の隆盛を物語る数少ない資料のひとつです。

（箱書）

四所明神 天明七<sup>末</sup> 三月修補之  
弘法大師 比之両影者元来高野山  
三法院寛雄上綱賜干  
予一宮寺 俊雄

けん ぽんちゃくしょくじゅうさん ぶつ ず

## 絹本着色十三仏図

※  
指定  
解除解除日：2025年1月25日  
※所有者の転出のため

- ・ 指定日 昭和59年3月22日
- ・ 所在地 上刈5丁目
- ・ 員数 1幅
- ・ 大きさ 縦81.4cm横36.4cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者

地図  
表 戻る

初七日から三十三回忌におよぶ故人の中陰<sup>ちゅういん</sup>・周忌<sup>しゅうき</sup>の法要にあたって、それぞれの本尊とされる13種の諸仏菩薩・明王を曼荼羅風に描いたものです。各尊は、朱<sup>ぐんじょう</sup>・群青<sup>ろくしょう</sup>・緑青等に金泥彩<sup>こんでい</sup>を交えてこまやかに彩絵され、輪光<sup>りんこう</sup>などには切箔<sup>きりはく</sup>も用いられて入念な作です。その謹直<sup>きんちよく</sup>な画風から南北朝時代<sup>くだ</sup>を下らないものと認められ、古例の少ない十三仏画像の貴重な遺品です。

もく ぞうしょうかんのんりゅうぞう  
木造聖観音立像



- ・ 指定日 明治39年4月14日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 140cm
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 平安

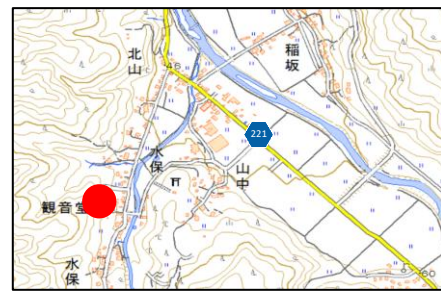
[地図表](#) 戻る



桜材の<sup>いちぼくづくり</sup>一木造で、姿勢、服装、<sup>こしも</sup>腰裳、顔、目、唇等は藤原時代の特徴をよく表現しています。<sup>ほうけい</sup>宝髻部及び<sup>ほぞ</sup>頭頂部の柄穴から仏首を植付けた十一面観音、さらに両手首を<sup>は</sup>矧ぎ、両肩側面に脇手を取付けた痕跡から千手観音であったとも推定されます。<sup>うちぐりそじ</sup>内刳素地で破損が甚だしかったため、昭和28年（1953）に修理が行われました。

もく ぞうじゅういち めん かののんりゅうぞう

## 木造十一面観音立像



- ・ 指定日 大正12年3月28日
- ・ 所在地 水保
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 155cm
- ・ 所有者 宝伝寺
- ・ 管理者 水保・北山氏子信徒総代
- ・ 時代 平安

[地図](#)  
表 戻る



水保観音堂の別棟にある<sup>ほうあんこ</sup>奉安庫に安置されるこの像は、一般に<sup>なたぼり</sup>鉦彫と呼ばれる丸ノミを横に用いて荒<sup>い</sup>っぽく彫る技法で作られ、新潟県内でも珍しい仏像です。桜材の<sup>いちぼくづくり</sup>一木造で、両手首は失われていますが、ノミの運びは自由で、素朴な穏やかさを感じさせます。頭部の<sup>てんかんだい</sup>天冠台上には、薄くなっていますが、墨書きで口を開いて笑った顔や、怒った顔など十面が描かれているのも珍しく、藤原時代における<sup>あらぼり</sup>荒彫、<sup>なたぼり</sup>鉦彫彫刻の一例として貴重な遺品です。

もくぞう ぬ な がわひめしんぞう

## 木造奴奈川姫神像



- ・ 指定日 昭和29年2月10日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 45cm
- ・ 所有者 天津神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 平安

[地図](#)  
表 戻る



天津神社境内の別社、奴奈川神社に安置されています。檜材の  
一木造で、彩色が施され、双髻を結び、髪は両肩に垂れ、拱手し  
て座っています。作りは簡素ですが神像独自の清澄な表現がみら  
れ、その温和で端正な像容の中に藤原時代の特色が見られます。

この地方は、古来より又ナカワと呼ばれ、『万葉集』に、「又  
ナカワの底なる玉…」と詠まれています。式内社である奴奈川神  
社であるか定かではありませんが、この神像がこの地に伝わって  
いることは古代文化史の上からも重要な意義があります。

もくぞうあみだによらいざぞう

木造阿弥陀如来坐像・

もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう

木造十一面観音立像



①



②

①木造阿弥陀如来坐像  
②木造十一面観音立像

- ・ 指定日 昭和29年2月10日
- ・ 所在地 日光寺
- ・ 員数 2軀
- ・ 像高 ①84cm②166cm
- ・ 所有者 日光寺
- ・ 管理者

地図表 戻る



日光寺に安置されているこの坐像と立像とも、<sup>けやき</sup> 檜材の<sup>いちぼくづくり</sup> 一木造で、平安時代初期の手法も見えますが、<sup>めんよう</sup> 面容が温和で<sup>たいく</sup> 体軀が肥厚をあらわさないところから、11世紀頃の作と推定されます。

坐像は膝上で<sup>じょういん</sup> 定印を結び、頭頂に見事な宝冠を頂いています。膝前は別木で<sup>は</sup> 矧ぎ、定印を結ぶ両手も膝部と共木から刻み出しています。目と唇に彩色が残る他は<sup>そじ</sup> 素地をあらわし、<sup>えもん</sup> 衣紋には<sup>ほんぱ</sup> 翻波式や渦紋が見られます。

立像も頭部体軀を一材から刻み出し、それに両手を<sup>は</sup> 矧ぎつけ体軀の作りも面容も本尊の阿弥陀如来像にきわめて近く、現在の両手、<sup>も</sup> 裳の下は後補です。

ぶ がくめん  
舞楽面



陵王面



納曽利面

- ・ 指定日 昭和56年3月27日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 4面 附1面
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



能生の白山神社春季大祭に使用される舞楽面で、<sup>りょうおう</sup>陵王2面、<sup>な</sup>納  
<sup>そり</sup>曾利2面の4面と<sup>つけたり</sup>附の1面（<sup>のうばとう</sup>能抜頭1面）の計5面です。

陵王面の材質は松で、漆箔、裏黒塗仕上げで、1面の裏面には  
次の朱漆銘が書かれています。

阿弥陀山 日光寺 寛正六天乙酉 大工国重 良弥賢瑜

また面と共に用いる<sup>しゃぐま</sup>赤熊の裏面には次の墨書があります。

元和四戌午天百二十一年己前糸魚川屋彦十郎寄進候得共毛悪敷

此度毛取替改申候 元文三年戌午天寄進人 岡本治部右衛門

このほか納曽利面の材質は<sup>きり</sup>桐で、<sup>ごふんじ</sup>呉粉地・黒塗、裏は<sup>そじ</sup>素地です。

能抜頭の材質は<sup>くすのき</sup>樟で、黒漆地朱漆彩です。

どう ぞうじゅういち めん かん のんりゅうぞう

## 銅造十一面観音立像



- ・ 指定日 昭和56年3月27日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 35.3cm
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 平安

[地図](#)  
[表](#) 戻る



洗練された平安時代後期の様式を示す小銅像で、顔が小さく細身の体軀たいくがすんなりと伸び、衣紋えもんは細線で簡潔に表され、裾すその広がりがが像に軽やかな感じを与えています。台座の形成もよく、像と調和しています。両手を失い、背面下半身などは火災のための破損が目立ち、鍍金とぎんは認められませんが、この神社所蔵の白山信仰関連遺品の小銅仏のうち、藤原様式を示す仏像として注目されます。

もくぞうたいちょうだい し ざ ぞう  
木造泰澄大師坐像



- ・ 指定日 昭和56年3月27日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 64.5cm
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町

[地図表](#) 戻る



白山の開祖者と伝えられる泰澄たいちょうの像で、後頭部内剖面うちぐりの墨書によって、大永4年（1524）に造立されたことが分かります。

作者八代々新□□住者 □庵勝秀大阿闍利 干時大永四甲申天  
五月吉日

像は当時の肖像彫刻によく見られる寄木造よせぎづくりで、玉眼ぎよくがんではなく、やや細かな平ノミ目を残して仕上げられています。ややゆるみはあるものの、堅実で膝前の衣紋えもんや膝頭脇そでに袖口を広げる様など、まとまりのある作です。二重瞼ふたえまぶたで眉をわずかに寄せ、面は伏せ気味で、左手は袈裟けさの端を執り、右手には五鈷杵ごこしよを構えています。

ぶ がくめん  
舞楽面



陵王面



納曾利面



抜頭面

- ・ 指定日 昭和56年3月27日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 3面 附5面
- ・ 所有者 天津神社
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



あまつ  
天津神社の春季大祭に使用されている舞楽面で、陵王1面、納  
そり ばとう つけたり のうばとう ちごな  
曾利1面、抜頭1面の3面と附の5面（能抜頭1面、納曾利1面、児納  
そり  
曾利2面、安摩<sup>あま</sup>1面）の計8面です。

陵王面の作風は伝統的な形式ながら、眼の縁や頬に皺を波打た<sup>しわ</sup>せるなど変化を求めて生彩<sup>せいさい</sup>を失わないところがあり、制作は鎌倉時代後期まで<sup>さかのぼ</sup>遡ります。

納曾利面は面長、眉や頬の肉の盛り上がり、額や眼を囲む納曾利面特有の並行する皺が消えているなど土俗化の傾向が見られ、室町時代後期頃の作と考えられます。

抜頭面は、四天王寺に伝わる舞楽面「蘇莫者<sup>そまくしゃ</sup>」に類似していますが、能面の猿や猿飛出<sup>さるとびで</sup>に共通する表情を持つことから、能面の型が形成される室町時代末期から桃山時代の作と考えられます。

もくぞうじょしんざぞう  
木造女神坐像



①

②

③

- ・ 指定日 昭和56年3月27日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 3軀
- ・ 像高 ①45cm②33cm③27cm
- ・ 所有者 天津神社
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



①は頸<sup>くび</sup>を立て、拱手<sup>きょうしゅ</sup>の手をやや胸高に挙げて丈高の感を強調し、膝張も広がっています。また両上膊<sup>じょうはく</sup>背面に横の丸ノミの目を表しているのが異色です。

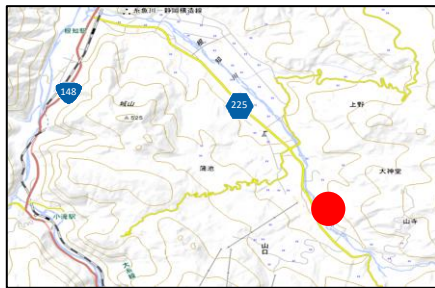
②は頭部が大きく肩が盛り、膝は張りを小さく厚く刻まれていて団塊性が強くなっています。拱手の手は袖口<sup>そで</sup>の彫りを略すなど、おおらかですが膝前に懸かる衣の縁や背面の腰でたるむ衣の様に心配りが感じられます。

③はやや前屈<sup>まえかが</sup>みの姿勢で、撫肩<sup>なでがた</sup>の体軀<sup>たいく</sup>は膝が薄く、こじんまりした感があります。襟元に下着の縁を表し、丈袖の袖口<sup>さくぐち</sup>や笄袖の袖口を表すなど、細部の表現にも意を用いています。

なお3軀のうち、②に平安風の簡素さがあり、③は鎌倉風、①はその中間に位置すると考えられますが、県内に残る数少ない古神像でも顕著な遺例です。

もくぞう と ばつ び しゃ もん てん りゅうぞう

# 木造兜跋毘沙門天立像



- ・ 指定日 昭和47年3月25日
- ・ 所在地 山寺
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 102.7cm
- ・ 所有者 金蔵院
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



平安時代の初め、日本に入ってきた西域方面（兜跋国 <sup>とばつ</sup> 現在のウイグル自治区付近）で信仰されていた兜跋毘沙門天立像の珍しい遺品です。本来は頭部、<sup>たいく</sup> 体軀はもちろん、下の地天女<sup>じてんによ</sup>まで一木彫ですが、現在は右腕の付根から先、左手の肘から先、右脚及び地天女の頭部と胴身部の一部が後補のものになっています。毘沙門天像の面部もかなりすり減っていますが、平安時代後期、11世紀頃の作と推定されます。

もくぞうしゃ か さんぞんぞう  
木造釈迦三尊像



①菩薩

②中尊

③文殊

- ・ 指定日 昭和47年3月25日
- ・ 所在地 蓮台寺2丁目
- ・ 員数 3軀
- ・ 像高 ①59cm②85.5cm③57cm
- ・ 所有者 蓮台寺区
- ・ 管理者
- ・ 時代 鎌倉

[地図](#) [表](#) 戻る



釈迦如来坐像を中尊とし、向かって左側には象に乗った普賢菩薩像、右側には獅子に乗った文殊菩薩像を配しています。

釈迦如来坐像は寄木造で、もとは玉眼を嵌入していたと考えられていますが、眼を埋めてしまっています。頭部体軀は別木で、頭部は前後左右矧ぎ、体軀は前後矧ぎで、背面は二材を寄せています。膝前は別木、裳先も別木で後補となっています。印相は左右とも第一指と第三指を結び、衣紋が深く自在に乱れる様は鎌倉時代末期の作であることを伝えています。

普賢、文殊菩薩像ともに寄木造、玉眼ですが、文殊菩薩の持物や宝冠は後世のものです。

もくぞうしゃかによらいざぞう  
木造釈迦如来坐像



- ・ 指定日 昭和47年3月25日
- ・ 所在地 羽生
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 41.5cm
- ・ 所有者 耕文寺
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



両手を膝前で定印<sup>じょういん</sup>に結ぶ釈迦如来像です。寄木造<sup>よせぎづくり</sup>、玉眼嵌入<sup>ぎよくがんかんにゅう</sup>の像で、肉身部は金箔、衲衣<sup>のうえ</sup>は彩色で盛り上げ文様がよく残っています。肉髻<sup>にくけい</sup>は低く、面相<sup>めんそう</sup>にやさしさが感じられます。双肩におおった衲衣の風や複雑に乱れた膝にかかる衣紋<sup>えもん</sup>等の表現はなかなか優れ、正系の仏師の作と思われ、宋朝美術<sup>そうちょう</sup>の影響が見うけられることから、室町時代の作と考えられます。台座・光背は、江戸時代の作です。

もくぞうでんせいし ぼ さつりゅうぞう  
木造伝勢至菩薩立像



- ・ 指定日 昭和47年3月25日
- ・ 所在地 日光寺
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 161.6cm
- ・ 所有者 日光寺
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



ひのき たいく は  
檜材を使い、頭部体軀は一木で刻み、両手を矧ぎつけていますが、両手足は後補です。同じく日光寺に残る[阿弥陀如来坐像](#)、[十一面観音立像](#)よりも体軀の抑揚が乏しく、制作年代もやや新しいものと推定されます。

せいし ぼ さつ ち え け ぶつ  
勢至菩薩とは一般的に智慧第一の菩薩とされ、宝冠の中に化仏ではなく、宝瓶があることが特徴です。独立像はあまりなく、観音菩薩とともに阿弥陀如来の脇侍となるため、見分けがつきにくいこともあります。

もくぞう し てんのうりゅうぞう  
木造四天王立像



広目天

増長天



持国天

多聞天

- ・ 指定日 昭和47年3月25日
- ・ 所在地 日光寺
- ・ 員数 4軀
- ・ 像高 4軀とも153cm
- ・ 所有者 日光寺
- ・ 管理者

[地図](#) [表](#) 戻る



日光寺観音堂の仏壇上に並ぶ四天王像は、向かって左側から<sup>こう</sup>広目天、<sup>ぞうちょう</sup>増長天、<sup>じこく</sup>持国天、<sup>たもん</sup>多聞天でいずれも<sup>いちぼくづり</sup>一木造です。ごく最近の補彩により真新しい感じを受けますが、よく見ると活動的な姿に作りだされ、それでいて十分な安定感をもち、<sup>たいく</sup>面部も体軀もよく肉がひきしまっていて見事な彫刻であることから、平安時代の古像のようです。

もくぞうあまつしやずいしんぞう  
木造天津社随神像



阿形



咩形

- ・ 指定日 昭和47年3月25日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 2軀
- ・ 所有者 天津神社
- ・ 管理者 室町
- ・ 時代

[地図](#)  
[表](#)

[戻る](#)



天津神社の2軀の随神像のうち、<sup>あぎょう</sup>阿形像の方には地付部に次の銘があります。

佛子民部□ 法眼  
本願代僧  
旦那関東秀通  
常陸國筑波根住  
菅谷大蔵太輔  
天文九庚子紀貫之  
拾月六日

これにより、両像が天文9年（1540）の作であることがわかります。<sup>よせぎづくり</sup>寄木造彩色の像で、多少傷んでいますが、随神像で銘のあるものは全国でも珍しく、貴重です。

なお本像には文政7年（1824）の修理銘もあります。

もくぞう ぬ な がわしやずいしんぞう  
木造奴奈川社随神像



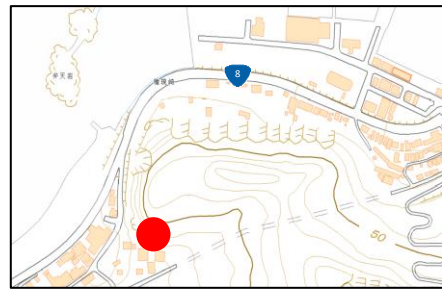
- ・ 指定日 昭和47年3月25日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 2軀
- ・ 像高 2軀とも48cm
- ・ 所有者 天津神社
- ・ 管理者

[地図](#)  
表 戻る



[天津神社本殿](#)の西側に並ぶ奴奈川神社の隨身像で、虫喰いが目立ちますが、天文の銘のある[天津社随神像](#)よりもやや古い作と考えられています。両足を垂下した姿も古様で、両足先は失われています。

の う はくさんじんじゃしんぶつぞうぐん  
能生白山神社神仏像群



- ・ 指定日 昭和47年5月12日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 43軀
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者 白山神社文化財保存会

[地図](#)  
[表](#) 戻る



平安時代から室町時代にかけて、信仰の対象として白山神社に併安されたものと推測されます。

地藏菩薩、僧形八幡神像、7軀の小仏像など桃山期あるいは江戸時代のものも含まれますが、平安時代末期の不動明王立像を最古として鎌倉時代の作とされる仏像が多数を占めます。白山権現に付随する寺社より伝わったものも多く、古代末から中世における当地の白山信仰の隆盛を今に伝える神仏像群です。

名称	員数	大きさ	時代
不動明王立像	1	像高92.5cm	平安末
男神像	1	像高68cm	鎌倉
男神像	1	像高59.8cm	鎌倉
菩薩立像	1	像高49cm	鎌倉後期
聖観音立像	1	像高42cm	室町
飛天像	1	像高35cm	鎌倉
菩薩坐像	1	像高24.2cm	鎌倉
菩薩立像	1	像高35.5cm	鎌倉
菩薩立像	2	像高30.5cm（宝髻あり）	室町
		像高27.1cm（宝髻なし）	
地藏菩薩	7	像高12～15cm	江戸
銅造不動明王懸仏	1	像高16.3cm直径30.3cm	鎌倉前期
菩薩坐像懸仏	1	像高16.8cm直径30.5cm	鎌倉前期
如来坐像	1	像高13.5cm	室町
銅造不動明王坐像	1	像高19.5cm	鎌倉
聖観音立像	1	像高23cm	鎌倉
十一面観音坐像	1	像高19.5cm	鎌倉
薬師如来坐像	1	像高12.7cm	鎌倉末～室町
不動明王坐像	1	像高11.5cm	鎌倉末～室町
力士像	1	像高13.8cm	
銅造菩薩坐像	1	像高3.8cm	鎌倉
僧形八幡神像	1	像高17.3cm	室町末～桃山
菩薩坐像	1	像高11.5cm	室町
獅子頭	1	像高8.5cm	鎌倉
小仏像	7	像高6.8cm～7.8cm、 10cm～13.1cm	桃山～江戸
木造不動三尊立像	3	像高51.5cm（不動像）	鎌倉
		像高31.5cm（制吒迦童子）	
		像高26.6cm（矜羯羅童子）	
木造不動明王立像	1	像高18cm	
木造菩薩立像	1	像高16.5cm	
木造聖観音立像	1	像高67.5cm	

もくぞうじゅういちめんかんのりゅうぞう

# 木造十一面観音立像



- ・ 指定日 昭和49年3月31日
- ・ 所在地 柱道
- ・ 員数 1軀
- ・ 全高 162cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者

[地図](#) [表](#) 戻る



小出山出生寺本堂中央の<sup>ずし</sup>厨子に納められている本尊で、33年毎に開帳される秘仏です。<sup>よせぎづくり</sup>寄木造、彫眼で彩色はなく、量感が豊かで胸に<sup>ようらく</sup>瑗瑗をつけているなど古様を示し、江戸時代の復古的な仏様と考えられています。台座の裏に次の銘文があります。

京柳寺場通 三条より二帳町 大仏師 由兵衛作

次左衛門 七郎左衛門 七左衛門 三九郎

<sup>しゅみだん</sup>須弥壇には、御前立ちの十一面観音・不動明王・毘沙門天・四天王等の宝暦、天保年間（1751～1763、1830～1843）に京都より移安されたと伝えられる仏像が重々しく立ち並んでいます。また背面の左右には千体仏の小さな仏像がぎっしり収められています。

だんしん じょしん ざ ぞう  
男神・女神坐像



①男神像

②女神像

- ・ 指定日 昭和50年1月18日
- ・ 所在地 平
- ・ 員数 1対
- ・ 像高 ①20.5cm②17cm
- ・ 所有者 大神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町

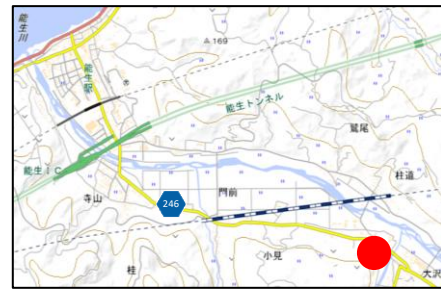
[地図](#) [表](#) 戻る



この神像は菅相公かんしょうこう（左、菅原道真公）と吉祥女きっしょうじょ（右、同夫人）にあたるといわれ、一木造いちぼくづくりでわずかに彩色を残しています。室町時代の作で、菅原道真公の死去に伴い、当時の双権頭そうごんのかみ、佐藤善司もりよしが神社の相殿天満宮まつにこの二神を祀ったと伝えられています。

じゅういちめんかんのりゅうぞう

# 十一面観音立像



- ・ 指定日 昭和50年1月18日
- ・ 所在地 平
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 24.7cm
- ・ 所有者 大神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町

[地図](#)  
[表](#) 戻る



かつて大字<sup>たいら</sup>平の西平地区にあった白山神社の祭神像と伝えられ、明治41年（1908）3月28日、大神社に<sup>ごうし</sup>合祀されました。左手に<sup>すい</sup>水瓶をとる一木造で、台座に「康正三年（1457）四月藤原好重<sup>よししげ</sup>」の文字が書かれていて、室町時代の作であることがわかります。

どう ばんかけぼとけ  
銅板懸仏



①



②



③

- ・ 指定日 昭和50年1月18日
- ・ 所在地 平
- ・ 員数 3面
- ・ 大きさ ①8.3cm②9.2cm③8.6cm
- ・ 所有者 大神社
- ・ 管理者

[地図](#)  
表 戻る

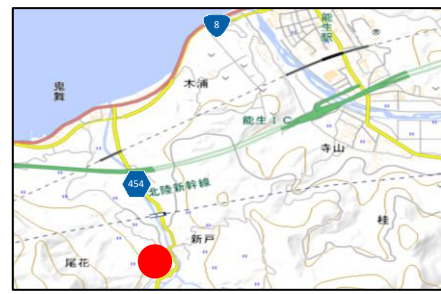


これらの懸仏は、その作風から室町時代の作とされます。  
懸仏は、円板に仏像などをつけて懸垂<sup>けんすい</sup>するようにしたもので、  
神殿内などに懸けて崇拝しました。

①は十一面観音を打出して、像の下辺に波を浮出させています。  
②は鏡面の一部が破損していますが、十一面観音坐像らしいものを別鑄にして中尊におき、同じく別鑄の水<sup>すい</sup>瓶<sup>びょう</sup>を配しています。  
これにも波形があり、中尊の目鼻も不明瞭です。

③は大神社の3字を浮出させ、下に三尊を配しています。大神の淵（大神社の森の前の流れ）の神事に神輿<sup>みこし</sup>の御神鏡として用いられたものとされています。この神事は天文13年（1544）の出水により、神輿等が流出したため行われなくなったと伝えられています。

だいにちによらいぞう  
大日如来像



- ・ 指定日 昭和50年1月18日
- ・ 所在地 木浦
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 65cm
- ・ 所有者 東陽寺
- ・ 管理者
- ・ 時代 鎌倉

[地図](#)  
[表](#) 戻る



桂材かつらの一木造いちぼくづくりで、両手の前、腰中央より先は別木です。目は彫眼ですが修理が加えられ、宝冠も後世のもので、白毫びやくごうは金属で後補されています。かつては金箔押しがなされていましたが、修理では檜ひのきが用いられました。本像は鎌倉時代、台座は江戸時代の作です。

「一本の木を三分し、三尊の大日如来を作ったうちの1体が東陽寺のもの」という伝説があります。ほかの2体は胎内市乙宝寺と上越市国分寺にあり、この三尊を「越の三大日」と呼んでいます。東陽寺は木の末うらのため3尺で、木浦の地名もこれに由来するといわれています。

現在の東陽寺は寛永年間（1624～1643）、小見龍光寺の末寺として僧淳岳により中興された曹洞宗の寺院ですが、本尊の存在から古くは真言宗であったものと推測されます。

もくぞう あ み だ に よ ら い ざ ぞ う  
木造阿弥陀如来坐像



- ・ 指定日 昭和50年3月27日
- ・ 所在地 真光寺
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 86cm
- ・ 所有者 真光寺区
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



来迎印<sup>らいごういん</sup>を結ぶ阿弥陀如来坐像で、檜材<sup>ひのき</sup>の寄木造<sup>よせぎづくり</sup>漆箔<sup>しっぽく</sup>仕上げですが、玉眼<sup>ぎよくがん</sup>は嵌入<sup>かんにゅう</sup>していません。丸頭で眼を伏せ、撫肩<sup>なでがた</sup>のおだやかな姿は、平安時代末期の作風を残しますが、肉付きに柔らかみ<sup>なめ</sup>が加わり、衣紋<sup>えもん</sup>の彫りがやや深くなっているあたりから、鎌倉時代前期の作とされます。なお像内背面に享保12年（1727）と書かれた板の札があり、この頃には真光寺阿弥陀堂にこの坐像があったことがわかります。

もくぞう ふ どうみょうおう ざ ぞう  
木造不動明王坐像



- ・ 指定日 昭和50年3月27日
- ・ 所在地 中浜
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 29cm
- ・ 所有者 禅雄寺
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



檜<sup>ひのき</sup>を用いた極彩色の坐像で、玉眼<sup>ぎよくがん</sup>を嵌入<sup>かんにゅう</sup>しています。体部は一材製です。左腰脇から背面右脇に至る線で堅割とし、内割<sup>うちぐり</sup>を施し、これに両腰脇部を矧<sup>は</sup>ぎ付け、両足部を矧<sup>は</sup>ぎ寄せています。両眼を見開く、いわゆる大師（空海）様の不動坐像で、表情も凄まじく、衣紋<sup>えもん</sup>の彫にも変化があり、しかも全体に重厚さを感じさせます。制作は近世初頭と推定されますが、光背や台座、持物<sup>じもつ</sup>等は後補で、寺伝では上杉謙信<sup>なみきり ふうとう</sup>の波切不動と称する秘仏です。

もくぞうによらいがたりゅうぞう  
木造如来形立像



- ・ 指定日 昭和50年3月27日
- ・ 所在地 中浜
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 19.6cm
- ・ 所有者 禅雄寺
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



台座の蓮肉<sup>れんにく</sup>までを檜<sup>ひのき</sup>の一材で丸彫し、衣紋<sup>えもん</sup>なども刻まず、拱手<sup>きょうしゅ</sup>するおおよその形のみを掘り出す素朴な造りですが、ふくらみのある顔や、丸みのある<sup>たいく</sup>体軀、その重みを支えるかのような、やや開き気味の両足のさまに豊かさが感じられます。おそらく平安時代後期の作と考えられます。

もくぞうこまいぬ  
木造狛犬



①

②



①

②

- ・ 指定日 昭和50年3月27日
- ・ 所在地 宮平
- ・ 員数 2対
- ・ 像高 左①38cm②43.5cm  
右①25cm②25cm
- ・ 所有者 劔神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町

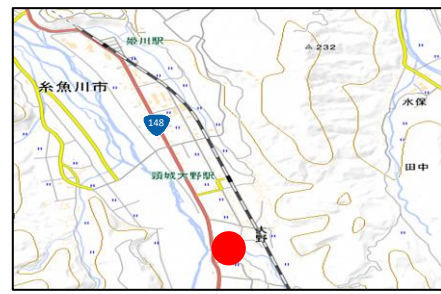
[地図表](#) 戻る



つるぎ 劔神社拝殿に残る狛犬二対で、左の一对は桂材、右の一对は檜材で、いずれも天文年間（1532～1554）の頃の作とされます。

同神社は、かつて「佐多神社」と称したとされ、延喜式に記載されたくびき郡十三座のうち、佐多神社推定地の一つであり、[永享の棟札](#)とともに、この神社の成立や起源はもちろん、早川地区の歴史を知る上で数少ない遺品の一つです。

もくぞうおおのしゃだんしんぞう  
木造大野社男神像



① ② ③



④

- ・ 指定日 昭和50年3月27日
  - ・ 所在地 大野
  - ・ 員数 4軀
  - ・ 像高 ①21cm②16.7cm  
③21.2cm④41cm
- ・ 所有者 大野神社
  - ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る

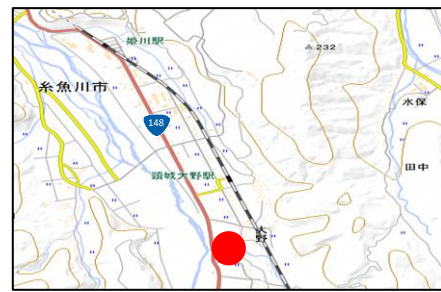


奥殿壇上に祀られる①～③は、檜材で彫り出され、いずれも冠をいただき、強装束をつけ拱手して笏を捧げて座っています。冠には墨彩、袖裏には朱彩が残り、吊り上る大きな眼が印象的で、角ばった簡素な体軀の表現は神像独自の面白さがあります。

①と③は鎌倉時代末期の作、②は顔も長めで、ひだの彫りや台座を共彫りするなど、多少の時代の遅れを感じます。

④は杉材で、幞頭の頂や左肩部などを矧ぎつけていて、室町時代初期の作とされます。

もくぞうおおのしやずいしんぞう とうぶ  
木造大野随神像 (頭部)



①吽形

②阿形

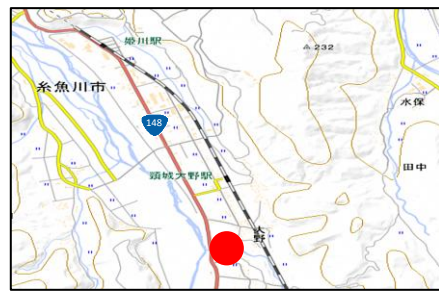
- ・ 指定日 昭和50年3月27日
- ・ 所在地 大野
- ・ 員数 2個
- ・ 大きさ ①24.5cm②23.7cm

- ・ 所有者 大野神社
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



大野神社の拝殿にある随神像の頭部で、同神社の[男神像](#)と同じひのき檜材で、作風等もほぼ類似していることから、室町時代初期のものと考えられます。他に左肩部や両足部も残っています。



もくぞうおおのじんしゃずいしんぞう りゅうぞう  
木造大野神社随神像 (立像)



①

②

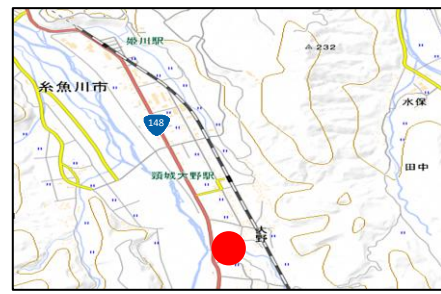
- ・ 指定日 昭和50年3月27日
  - ・ 所在地 大野
  - ・ 員数 2軀
  - ・ 像高 ①41cm②49.8cm
- ・ 所有者 大野神社
  - ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



<sup>ひのき</sup> 檜材で造られた立像で、大野神社の男神像と材質、作風等が類似していることから、室町時代初期のものと考えられています。  
破損と虫喰いが著しく、両手足を欠いています。

もくぞうおおのしゃじゅうおうぞう  
木造大野社十王像



- ・ 指定日 昭和50年3月27日
- ・ 所在地 大野
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 41.3cm
- ・ 所有者 大野神社
- ・ 管理者

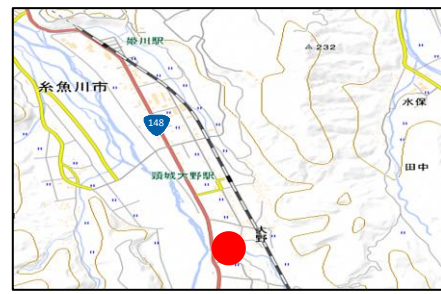
[地図](#)  
[表](#) 戻る



ひのき いちぼくづくり  
檜材の一木造で大野神社の男神像と材質、作風等が類似していることから、室町時代初期の作と推測されます。

同神社に南北朝から室町時代初期の作と考えられる破損した神仏像が数多く残っているのは、この神社の起源と変遷を物語っています。

もくぞうおおのしゃじぞうぼさつざぞう  
木造大野社地藏菩薩坐像



- ・ 指定日 昭和50年3月27日
- ・ 所在地 大野
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 53cm
- ・ 所有者 大野神社
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



体部、岩座ともかつら桂材のいちぼくづくり一木造で、左足は踏み下げ、手・足とも先を欠いています。大野神社の男神像と材質、作風等が類似することから、南北朝から室町時代初期にかけての作と考えられます。

せきぞうによらいがたざぞう  
石造如来形坐像



- ・ 指定日 昭和55年4月22日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 49.5cm
- ・ 所有者 天津神社
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



大きく蓮弁形に象った石材に、<sup>かたど</sup>定印を結んで薄い<sup>じょういん</sup>框座に座る如来形像を浮彫にしています。磨損が著しく顔立ちも明らかではありませんが、阿弥陀如来と判断してよいでしょう。面長で<sup>なでがた</sup>撫肩のおだやかな表情から、鎌倉時代後期の作と想定できます。

[石造阿弥陀如来坐像](#)とともに当地方における中世の信仰のあり方を示す数少ない石造物です。

せきぞうあみだによらいざぞう  
石造阿弥陀如来坐像



- ・ 指定日 昭和55年4月22日
- ・ 所在地 一の宮4丁目
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 36.4cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



<sup>めんぼう</sup>面貌は著しい風化によって目・鼻・唇ともに明らかではありませんが、両手は膝上で<sup>じょういん</sup>定印を結び、<sup>のうえ</sup>衲衣は左肩をおおい、右肩に懸かっています。やや頬が下ぶくれで、つつましい胴体、<sup>ひじ</sup>臂を直角に曲げて膝に載せるさまが可愛いらしく、簡素な<sup>えもん</sup>衣紋や<sup>いたび</sup>板碑からの影響を想わせる蓮華の線刻もよく整理されています。室町時代の作と推定され、当地方に残る数少ない石造物の一つです。

もくぞうしゃかによらいざぞう

## 木造釈迦如来坐像

※  
指定  
解除解除日：2025年1月25日  
※所有者の転出のため

- ・ 指定日 昭和59年3月22日
- ・ 所在地 上刈5丁目
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 11cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る

木造漆箔仕上げで印相は施無畏与願印を結び、姿は結跏趺坐です。顔は面長にしておだやかですが、制作年代は不詳です。

もくぞうあみだによらいりゅうぞう

# 木造阿弥陀如来立像



※  
指定  
解除

解除日：2025年1月25日  
※所有者の転出のため

- ・ 指定日 昭和59年3月22日
- ・ 所在地 上刈5丁目
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 30cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



檜材ひのきの寄木造よせぎづくりで、螺髪らほつや眼は彫り出しています。小づくりの眼・鼻・唇が顔の中央にまとまったおだやかな表情で、衣紋えもんの彫りも自然で誇張がないのが特徴です。鎌倉時代末期の作と考えられます。早川地区の不動山城主とされる山本寺氏さんぼんじに仕えた伴家ばんに伝わる仏像の一つであり、往時の不動山城の隆盛を物語る数少ない遺品です。

もくぞう ふ どうみょうおうりゅうぞう

## 木造不動明王立像

※  
指定  
解除解除日：2025年1月25日  
※所有者の転出のため

- ・ 指定日 昭和59年3月22日
- ・ 所在地 上刈5丁目
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 47.5cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者

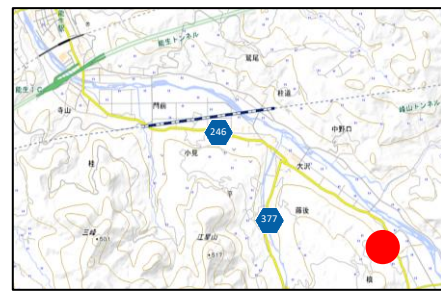
[地図表](#) 戻る

檜材ひのきの寄木造よせぎづくり、彩色、玉眼ぎょくがん嵌入かんにゅうの立像で、両眼を瞋らせ左手にけんさく羅索を、右手に剣を捧げ左足を踏み出しています。表情や姿・容かたち、流動する衣紋えもんに生氣があり彫りも強く、おそらく南北朝時代の作と考えられます。

これも [木造阿弥陀如来立像](#) と同じく、不動山城主に仕えた伴家ばんに伝わる遺品の一つです。

もくぞうじゅういちめんせんじゅかんのんりゅうぞう

# 木造十一面千手観音立像



- ・指定日 昭和63年9月8日
- ・所在地 榎
- ・員数 1軀
- ・像高 145cm
- ・所有者 耕田寺
- ・管理者

[地図表](#) 戻る

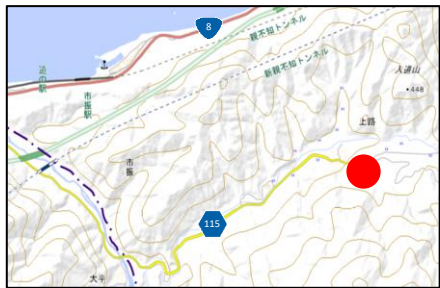


本体、台座ともに檜材の寄木造で、彩色部以外は素地です。頭体部は内刳、頭部両耳前線で前後矧ぎとし、三道下際で体部をつないでいます。体幹部は両肩から垂直三部分に矧ぎ、真手、宝鉢手、左右脇手および臂、手首を矧ぎ付けています。形状は髻を結び、髪筋をあらわし中央で左右に分け、鬢髪一条が耳前に垂れています。化仏は正面に如来立像、頂上面のほか左右に4面ずつ、計10面をのせ、白毫相をあらわし、彫眼、三道を刻んでいます。なお眉、目、髭、髪は墨で描かれ、唇は朱で彩色されています。

条帛、裳をつけ、天衣は両臂にかけ台座部まで垂下しています。

真手胸前で合掌し、宝鉢手は腹前に掌を上にして組み、その他、左右脇手19本ずつ各持物を保持していますが、うち左右1本ずつは左手に鉾、右手に錫杖を持っています。以上42本の手を有しています。

あげろ じゅうにしゃ はいでん そうしょくちょうこく  
上路十二社拝殿裝飾彫刻



- ・ 指定日 平成5年9月27日
- ・ 所在地 上路
- ・ 員数 1式
- ・ 所有者 十二社
- ・ 管理者
- ・ 時代 明治

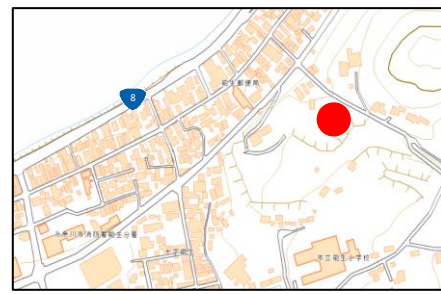
[地図](#)  
[表](#) 戻る



社は明治13年（1880）、大工棟梁の建部源太郎、木挽棟梁の高沢菊五郎そして、彫刻棟梁の北村喜代松により建築されました。北村家の生家は宮大工であり、その家業を継いだ喜代松の壮年期の作がこの裝飾彫刻です。雲竜、唐獅子はもちろん、唐草模様等いずれもその形体は江戸時代末期の神社裝飾彫刻の手法に<sup>かな</sup>適い、材質の特性をよくいかした刀痕は鮮やかなものを感じさせる作品です。

信越を中心にすぐれた寺社彫刻を残した北村喜代松の数少ない遺作の一つです。

もくぞうじゅういち めんかんのんりゅうぞう  
木造十一面観音立像



- ・指定日 平成6年7月22日
- ・所在地 能生
- ・員数 1軀
- ・像高 56cm
- ・所有者 光明院
- ・管理者

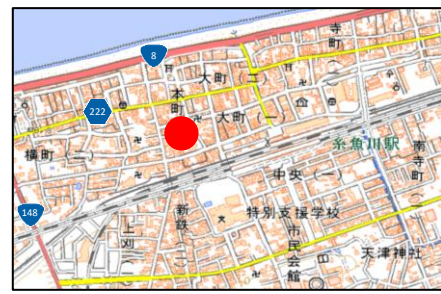
地図  
表 戻る



光明院の本尊で、江戸時代初期か、あるいはそれをやや<sup>さかのぼ</sup>遡る頃の作と考えられ、<sup>よせ</sup>寄木造、<sup>ぎづくり</sup>玉眼嵌入の像で<sup>ぎよくがん</sup>肉身部は肉色、<sup>かんにゆう</sup>衣紋は<sup>えもん</sup>彩色ですが、一部剥落しています。左手に<sup>すいびょう</sup>水瓶、右手に<sup>しゃくじょう</sup>錫杖を執る<sup>はせ</sup>長谷式観音像ですが、右手は錫杖を執るように作られていないことから、後世変えられたものと考えられます。

白山神社が白山大権現の頃、神社前にあった観音堂に<sup>まつ</sup>祀られていたとされ、かつては越後横道三十三観音の第八番札所で中山観音として崇敬されていました。明治初年、廃寺により別当寺の宝光院へ移されましたが宝光院も間もなく廃寺となり、光明院がその後を継いで現在に至っています。

きょうおうじ ぼんしょう  
**経王寺の梵鐘**



- ・ 指定日 昭和47年3月28日・ 所有者 経王寺
- ・ 所在地 新鉄1丁目 管理者
- ・ 員数 1口
- ・ 通高・口径 108cm・65cm

[地図表](#) 戻る



鐘身の上半分で鐘の径が急に狭くなり、激しい曲線を描く極めて特徴のある形をなしています。この手法は、越中国（富山県）で活躍していた黒部系いもじ鑄物師の特色で、銘文からも、この鐘の作者が越中国前沢金屋（黒部市）の鑄物師大工で、永享4年（1432）に糸魚川の人達が地元のじんぐうじ神宮寺に奉納したものであることがわかります。

明治のはいぶつ きしゃく廃仏毀釈で経王寺へ来たものですが、神宮寺の遺品の一つであるとともに越中の中世鑄物師が本貫を刻んだ梵鐘としては現存する最古のものであり、新潟県に現存する数少ない中世の梵鐘の一つです。

ぼんしょう

## 梵鐘



- ・ 指定日 昭和51年3月31日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1口
- ・ 通高・口径 107cm・68.4cm
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町

[地図表](#) 戻る

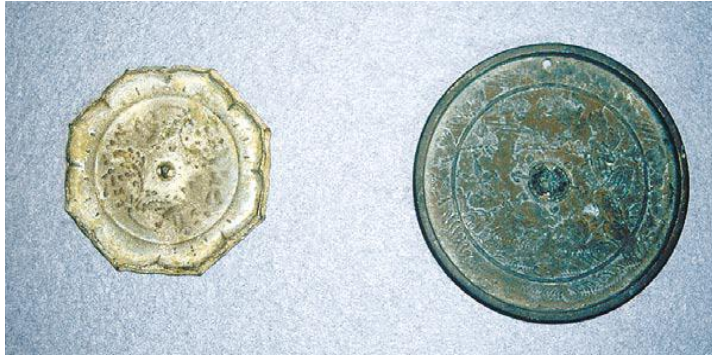


銘文から白山権現の別当能生山<sup>たいへいじ</sup>泰平寺の鐘で、明応8年（1499）に能登国中居浦（石川県穴水町）で造られたことがわかります。鐘堂は神社南側の高台にあったとされていますが、延宝8年（1680）の大雪のため破損、元文5年（1740）に修理されましたが、明治の<sup>はいぶつきしゃく</sup>廃仏毀釈により、再び破損したと伝えられ、上下に割れています。

なおこの梵鐘は「<sup>しおじ</sup>汐路の鐘」として親しまれています。

越後國泥川保内 能生山泰平寺鐘 神物并時講衆奉賀也  
 干時明応八年己未七月吉日 能登国中居浦 大工藤原国次  
 治郎左衛門尉 延宝八年大雪之節損 其後鑄掛 干時元文五庚申  
 天 願主岡本庄助 冶工 藤原氏柏崎住 荒井藤右工門  
 白山別当 宝光院現住 快隆代

の う はくさんじんじゃ こきょう  
能生白山神社古鏡



①八稜鏡

②円鏡

- ・ 指定日 昭和47年5月12日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 2面
- ・ 直径 ①8.5cm②11cm
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者 白山神社文化財保存会

[地図表](#) 戻る



八稜鏡はちりょうきょうは能生の白山神社社叢しゃそうの東方旧社殿跡から出土したとされ、菊座も簡単な短い線を放射状に刻してあり、縁の部分が内側に勾配がついて少し厚くなっていますが、全体としては非常に薄く、藤原時代の作と推定されます。

円鏡えんきょうは本殿前の御手洗付みたらし付近から出土したとされ、同社社叢の西端山頂の旧宮跡から流れ落ちたものとも考えられます。隅の方に釘孔くぎあながあり、亀座の片方に2羽の雀が見え、その配列の状態から鎌倉時代以前の作と考えられます。

あまつしゃだいかげぼとけ

# 天津社大懸仏



①



②

- ・ 指定日 昭和48年3月26日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 2面
- ・ 直径 ①70.5cm②91cm
- ・ 所有者 天津神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町



天津神社には多数の懸仏が伝わっています。

①の表には薄手青銅の薬師如来像がはりつけてあり、天津神社の本地仏ほんじぶつと考えられています。

②は仏像を欠くものの日本に現存する懸仏の中でも最大級に属し、たいへん珍しいもので、墨書から、文安6年（1449）の作とわかります。

大檀那 大施主 比丘尼妙従

干時 文安六年

奉懸 御正体一社 越後国沼河保一宮天津社

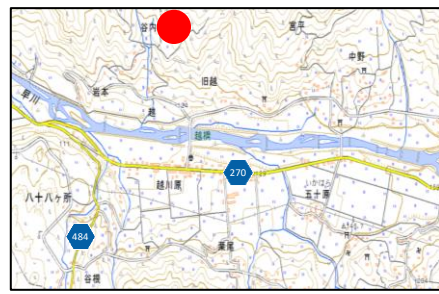
宮司 金玉丸

願主 少僧都 日蔵坊良源

六月廿一日敬白

かけぼとけみしょうたい

# 懸仏御正体



- ・ 指定日 昭和50年3月27日
- ・ 所在地 越
- ・ 員数 44面
- ・ 直径 4～41cm
- ・ 所有者 越区
- ・ 管理者

[地図](#)  
表 戻る



御正体44面は、<sup>じょういん</sup>定印を結ぶ仏形や合掌の僧形、<sup>きょうしゅ</sup>拱手の女神の姿を表すなど、いずれも銅薄板を<sup>ひのき</sup>檜または杉板に貼りつけて鏡板としています。像の<sup>すいびょう</sup>水瓶などを別鑄にしたり、<sup>ふくりん</sup>覆輪・<sup>けんたい</sup>圈帯の花飾りなどを銅薄板で切り抜いて貼り付け、<sup>とぎん</sup>鍍金を施すなどやや丁寧な造りのものもあります。総じて精巧とはいいい難く、稚拙で形式化したものが多いことから室町時代後期から江戸時代にかけて相次いで奉納されたものと見られ、当時の信仰形態をうかがうことができます。

かたな

# 刀（銘：糸魚川池原久補所持 同所之住藤原弘繁作）



- ・ 指定日 昭和52年11月30日
- ・ 所在地 本町
- ・ 員数 1口
- ・ 刃長・反 71.4cm・2cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図表](#) [戻る](#)



指し表棟寄りに所持者名、刃寄りに作者名を長銘に、指し裏棟寄りに天保11年（1840）の年記があります。この刀は注文打で特に入念に作られていて出来も見事です。糸魚川の刀工藤原弘繁の数少ない逸品の一振りであり、刃文は華麗な丁字乱れを焼いています。

糸魚川池原久補所持

同所之住藤原弘繁作

天保十一子年二月日

かたな

# 刀（銘：越絲魚川住弘繁）



- ・ 指定日 昭和59年3月22日
- ・ 所在地 本町
- ・ 員数 1口
- ・ 刃長・反 62.8cm ・ 1.9cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図](#)  
[表](#) 戻る



指し表棟寄りに長銘、刀寄りに「正八万宮」、指し裏刀寄りに所持者名、棟寄りに天保11年（1840）の年記があります。この刀は注文打で入念に作られていて出来も見事で、糸魚川の刀工藤原弘繁ひろしげの数少ない逸品の一振りです。寸法が短いのは注文者の希望と思われます。

越絲魚川住弘繁

正八万宮

見邊善左工門政親所持

天保十一子年八月日

かたな

## 刀（銘：越後糸魚川住北辰子弘繁作）



- ・ 指定日 昭和59年3月22日
- ・ 所在地 東寺町1丁目
- ・ 員数 1口
- ・ 刃長・反 69.8cm・1.6cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図表](#) 戻る

指し<sup>さ</sup>表<sup>おもて</sup>棟寄りに長銘、指し<sup>さ</sup>裏<sup>うら</sup>棟寄りに安政3年（1856）の年記があります。この刀は長さに比していくらか細身に見え、まことに優美な刀姿で糸魚川の刀工藤原<sup>ひろしげ</sup>弘繁の数少ない逸品の一振りです。目釘孔<sup>めくぎあな</sup>2個は拵<sup>こしらえ</sup>の関係でできたものです。

越後糸魚川住北辰子弘繁作

安政三<sup>辰</sup>年二月日

かたな

## 刀（銘：越後絲魚川住北辰子弘繁作）

※  
指定  
解除

解除日：2018年2月21日  
 ※火災等の被熱により  
 原状をとどめていない

- |               |              |              |    |
|---------------|--------------|--------------|----|
| ・ <u>指定日</u>  | 昭和59年3月22日   | ・ <u>所有者</u> | 個人 |
| ・ <u>所在地</u>  | 本町           | ・ <u>管理者</u> |    |
| ・ <u>員数</u>   | 1口           | ・ <u>時代</u>  | 江戸 |
| ・ <u>刃長・反</u> | 68.5cm・1.6cm |              |    |

[地図](#)  
表 戻る



指し表棟寄りに長銘、指し裏棟寄りに安政2年（1855）の年記  
 があります。この刀は長巻直しの形で作られたものであり、身幅  
 が広く、重ねが厚く、みるからに豪壮な刀姿で、糸魚川の刀工藤  
 原弘繁ひろしげの技量の高さを如実に示した一振です。

越後絲魚川住北辰子弘繁作

安政二卯年二月日

どうせい かけぼとけ

## 銅製懸仏



※  
指定  
解除

解除日：2025年1月25日  
※所有者の転出のため

- ・ 指定日 昭和59年3月22日
- ・ 所在地 上刈5丁目
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 7.7cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



定印じょういんを結び蓮華二重座に座る阿弥陀如来の姿で、髪際は波形に彎曲わんきよくし、連弁は葉脈を刻んでいます。おだやかで親しみのある表現で、鎌倉時代末期の作と考えられます。現在は鏡板を失っていますが、もとは頭頂部及び蓮華下底中央部から後方に突出した柄ぼぞで、鏡板に留められていたと考えられます。

の う はくさんじんじゃ ほうけん  
能生白山神社の宝剣



- ・ 指定日 平成27年4月30日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1口
- ・ 刃長・茎 30cm・10.9cm
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町

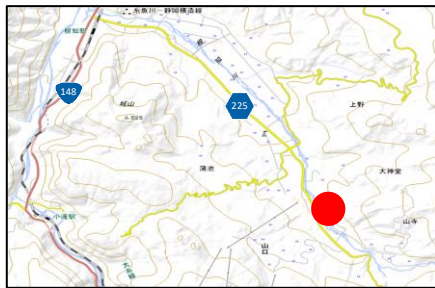
[地図表](#) 戻る



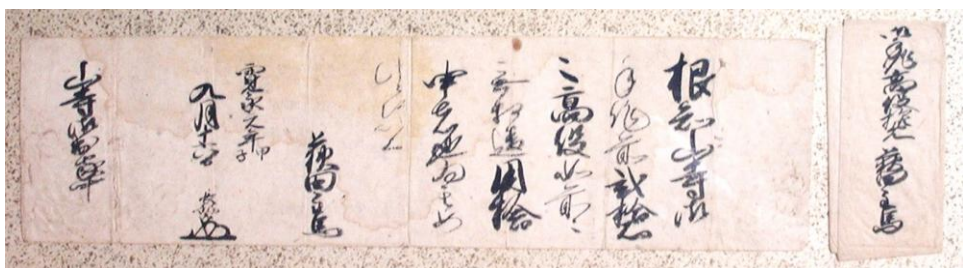
先端が鋭く尖った反りのない両刃造りの剣で、茎には「宇多兵衛三郎国宗」の銘と「文安三年五月十三日」の年紀が切られています。国宗は室町時代中期の刀匠で、越中国を本拠とした宇多派刀工の初代として知られます。本作は宇多派の典型的な作風を示しますが、県内及び富山県内国県指定物件を見ても太刀が多く、宇多派作で年紀が切られた剣は極めて珍しいと言えます。また、国宗の在銘作で「兵衛三郎」と切ったものはほとんど見られないため、資料としても貴重です。

きゅうせんじゅ いん もん じょ

## 旧千手院文書



上杉景勝朱印状



荻田主馬安堵状

- ・ 指定日 昭和46年3月26日
- ・ 所在地 山寺
- ・ 員数 11通
- ・ 所有者 金蔵院
- ・ 管理者
- ・ 時代 戦国～江戸

[地図表](#) 戻る



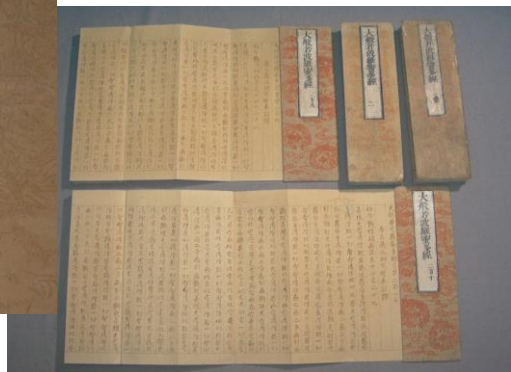
信越国境に近い根知谷山寺で隆盛を誇った千手院に伝わったこの11通の文書は、戦国時代末期から江戸時代初期における当地方領主と寺院との関係を示す数少ない資料です。

- 上杉景勝（朱印状）－天正10年（1582）－山寺院主（院主は千手院）
- 西片房家（寄進状）－天正11年（1583）－南水穂寺（西片は景勝の家臣で根知城将）
- 桜井晴吉（判物）－天正14年（1586）－院主御房（桜井は景勝の家臣で根知城将）
- 堀 左門（社領安堵状）－慶長4年（1599）－弥勒院（堀左門は根知城主）
- 堀 左門（安堵状添状）－慶長4年（1599）－飯縄別当御房御同宿中
- 本須佐太夫（書状）－慶長4年（1599）－根知いづな別当坊
- 堀 隼人佐（安堵状）－慶長5年（1600）－弥勒院（堀隼人佐は根知城主）
- 堀 六兵衛尉（添状）－慶長5年（1600）－別当御房御同宿中（堀六兵衛尉は根知城の代官）
- 堀 清重（加増寄進状）－慶長11年（1606）－飯縄殿別当千手院（堀清重は清崎城主）
- 市川茂左衛門（安堵状）－元和2年（1616）－山寺御出家中（市川は幕府領の代官）
- 荻田主馬（安堵状）－寛永元年（1624）－山寺御出家中（荻田主馬は清崎城代）

※差出（書状名）－年号－宛書（備考）の順

とくしゅうけっしょきょうかんならびにきょうが

## 得宗血書經卷並經画



- ・ 指定日 昭和47年3月25日
- ・ 所在地 田伏
- ・ 員数 經卷600卷  
經画17幅
- ・ 所有者 大雲寺
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図](#)  
[表](#) 戻る



血書600巻と文字画仏40軸は古くから大雲寺に伝わる秘宝です。今から150年前の文政年間（1818～1829）に得宗和尚（曹洞宗金峰山大雲寺第十二世住持職尚）が自身の顔面から鮮血を絞って經典や、經典の文字により仏画を描いたもので、その数、大般若經600巻を全巻、その他諸經10巻、釈尊<sup>しゃくそん</sup>及び諸菩薩の經文字画像大小合わせて40余軸（指定は寺院に現存する17幅）にのぼります。600巻の血書が完成したのは発願から21年目の天保11年（1840）とされ、並行して行われた画像も、その2年後に完成しています。これらの血書は得宗和尚の一世一代の大事業として完成したもので、貴重な書跡です。

こんしこんじいっさいきょう  
紺紙金字一切経



- ・ 指定日 昭和47年5月12日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1巻
- ・ 長さ・巾 982cm・25.5cm
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者 白山神社文化財保存会
- ・ 時代 平安

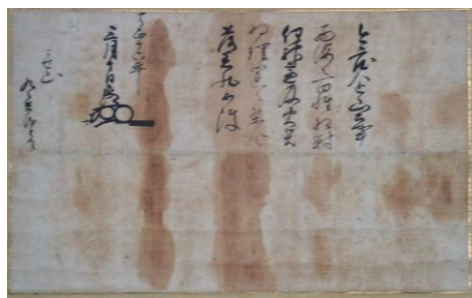
[地図](#) [表](#) 戻る



平安時代に書写された般若波羅蜜多經卷で、地は鳥の子を使い紺で染め、これに銀線を入れ、その中へ金泥で経文を写しています。扉の裏には金泥で豊かな唐草模様が施され、扉の図は釈迦の説法図で所々に銀泥を使ってぼかしてあります。構成は1行が17文字で、写経の常道によって書かれ、筆は柳葉という筆を使い、倒さずに真直ぐ立てて書かれています。また書体は文字の偏を小さく、旁を大きく書いてありますが、字の幅よりも高さを高く書いているため、藤原風の特徴がよく表れています。

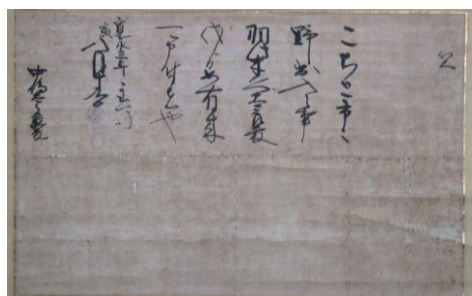
しちにんまちかけじくもんじょ

## 七人待掛軸文書



直江兼続裁許状

今度企山公事 西海之百姓相对  
 任神慮及火災 為理運候条令  
 落着状如件  
 天正十六年  
 三月十日 直江（花押）  
 こせ山九郎兵衛と乃



荻田主馬安堵状

こちと市野々出入之事 羽柴  
 久太郎殿代より如有来可申付者也  
 寛永三年主馬  
 寅八月十九日（印）  
 中嶋太郎兵衛殿

- ・ 指定日 昭和48年3月26日
- ・ 所在地 御前山
- ・ 員数 2通

- ・ 所有者 御前山区
- ・ 管理者 御前山生産森林組合
- ・ 時代 江戸

[地図](#)  
[表](#) 戻る



天正16年（1588）、御前山村と市野々村が山林の境界争いをした時、上杉景勝の執政である直江兼続が下付した裁許状と、その後領主が代り、糸魚川城代の荻田主馬が寛永3年（1626）に出した安堵状を、御前山村の当時の百姓7人が1幅の掛軸にして7人待の祭事を行ったものです。山公事文書としては市内最古のもので、山公事の勝敗のつけ方は、両者が紀州熊野社の神聖な紙（牛王宝印）を焼いて灰にして飲み、腹痛を起こした方が負け、というもので、この時は御前山村が勝ったとされています。



りょうかん い ぼく

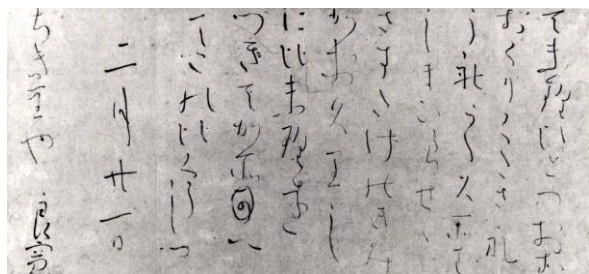
# 良寛遺墨

つげたりつぼうち しょうよう そう ま ぎよ ふう しょ

## 付坪内逍遥・相馬御風書



伝亀田鵬斎画 良寛賛  
「良寛と子どもの像」



良寛書状 ちきりや宛「てまりひとつ」

- ・ 指定日 昭和48年3月26日
- ・ 追加指定日 平成4年4月28日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 良寛遺墨書18点付書2点
- ・ 所有者 糸魚川市
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



[糸魚川歴史民俗資料館](#)所蔵。良寛研究の第一人者として活躍した相馬御風が収集した良寛資料です。良寛は、江戸時代後期の禅僧で、越後出雲崎の人です。日本や中国の法帖ほうじょうに学び、「大愚だいぐ」と号して多くの優れた詩歌や書を残しました。遺墨のうち、「紀行文断簡」は、良寛の旅日記「関西紀行」の一部で、諸国行脚あんぎゃ時代の足どりと初期の筆跡を知ることができる数少ない資料の一つです。なお、付資料つげたりの書2点は、日本近代文学をリードした坪内逍遥筆「月の兔」、御風筆「自作良寛坊物語の一節」です。

(良寛と子どもの像)

日々日々又日々間伴  
 兒童送此身 袖裏  
 毬子両三箇 無能  
 飽醉太平春

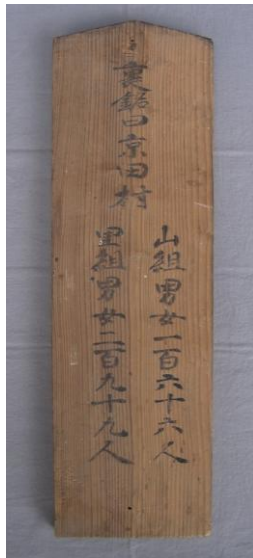
釋良寛書

つるぎさんしゃ ぜん でんむなふだ

# 劔三社前殿棟札



表



裏

- ・ 指定日 昭和50年3月27日
- ・ 所在地 宮平
- ・ 員数 1枚
- ・ 大きさ 縦42cm横11cm

- ・ 所有者 劔神社
- ・ 管理者



早川地区の劔神社の歴史を知る上で貴重な棟札で、永享3年（1431）に「一天安全・四海太平・風雨順時」のため、京田村（早川東側の村）の山組の男女166人と、里組の男女299人とが力を合わせて、新しく社殿を建立したことを記しています。注目されるのは左衛門と平左衛門の2人が「大領」「少領」を名乗り、「古志公」を称していることで、慶長3年（1598）の検地帳にも神主である2人の子孫の名が見えることから、古代郡司の第一・二等官が古くからこの土地に土着していたことがわかります。

大領宮司左示門太夫古志公義盛

永享三年<sup>辛亥</sup>今上皇帝一百三代

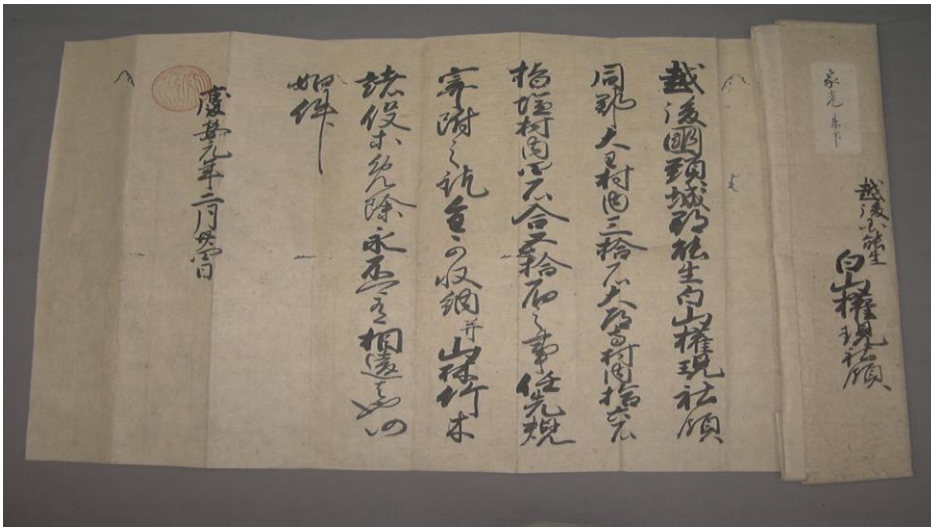
(表)

少領宮人平左示門古志公長久

奉造立矛獄座京田劔三社権現前殿一天安全四海太平風雨順時  
六月二日成就 將軍家義教公 大工しろむら

しゅいんじょうさん だいしょうぐん とくがわいえみつ

# 朱印状三代將軍徳川家光



徳川家光朱印状

- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 11点
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者 白山神社文化財保存会
- ・ 時代 江戸

[地図表](#) 戻る

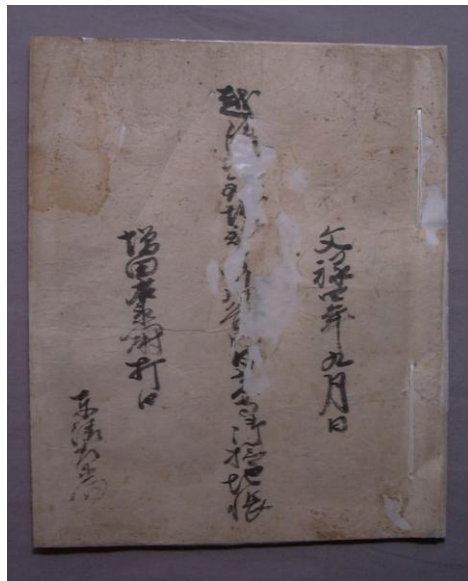


能生の白山神社はかつて白山大権現といわれ、戦国時代には上杉氏の庇護を受け、社領200貫、宗徒寺院は太平寺をはじめとして22寺もありました。しかし、慶長3年（1598）の上杉景勝の会津（福島県会津若松市）移封の後には、社領の総てが没収され、祭祀料はわずかに7石となり、かつての繁栄は見られなくなりました。

この文書は白山神社に下付された朱印状等で、徳川幕府代々の将軍から手厚い庇護を受けて隆盛をきわめた、神社の歴史等を示す貴重な資料です。

大久保石見守長安	慶長16年 (1611) 9月19日	徳川家治 (10代)	宝暦12年 (1762) 8月11日
徳川家光 (3代)	慶安元年 (1648) 2月24日	徳川家齐 (11代)	天明8年 (1788) 9月11日
徳川家綱 (4代)	寛文5年 (1665) 7月11日	徳川家慶 (12代)	天保10年 (1839) 9月11日
徳川綱吉 (5代)	貞享2年 (1685) 6月11日	徳川家定 (13代)	安政2年 (1855) 9月11日
徳川吉宗 (8代)	享保3年 (1718) 7月11日	徳川家茂 (14代)	万延元年 (1860) 9月11日
徳川家重 (9代)	延享4年 (1747) 8月11日		

えちごのくにくび きこおりはやかわだにのうちにっこうじ ごけんちちょう  
越後国頸城郡早川谷之内日光寺御検地帳



- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1冊
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 安土桃山

[地図表](#) 戻る

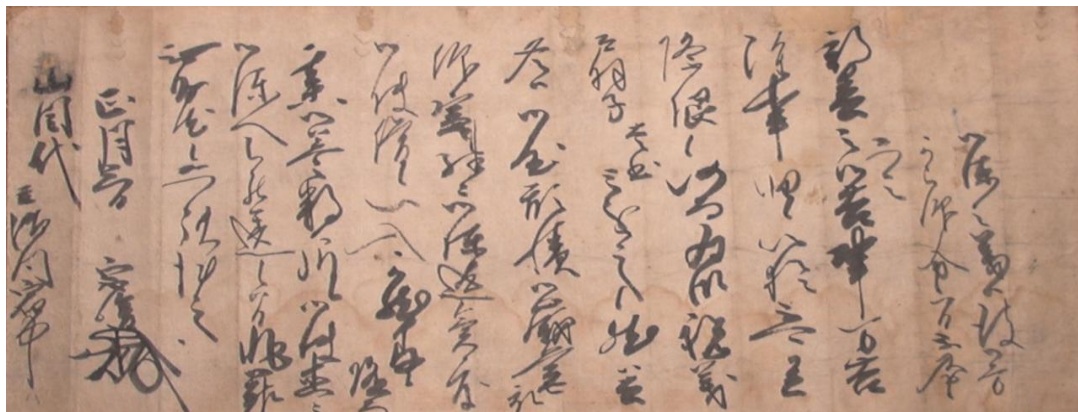


豊臣秀吉の五奉行、増田長盛を打口とする越後国検地帳は10冊が現存していますが、これはそのうちの1冊で、検地帳の形式は最も完成した太閤検地方式を示しています。

表記内容は1頁に6行6段で、1段目は上中下の位付け、2段目は縦横の間数、3段目は田畑・屋敷の別、4段目は面積、5段目は石高表示による分米、6段目は名請人になっています。表紙の東清左衛門尉は現地の責任者で、末尾には実際に検地を行った小森九左衛門尉の名があります。天正10年（1582）に始まった太閤検地もこの地では文禄4年（1595）に行われたことがわかります。

文禄四年九月日  
越後国頸城郡早川谷日光寺御検地帳  
増田右衛門尉打口  
東清左衛門尉

ほんじょうそう かんしょじょう  
本庄宗緩書状



- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1点
- ・ 大きさ 縦19.9cm横41.3cm
- ・ 所有者 実相院
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町

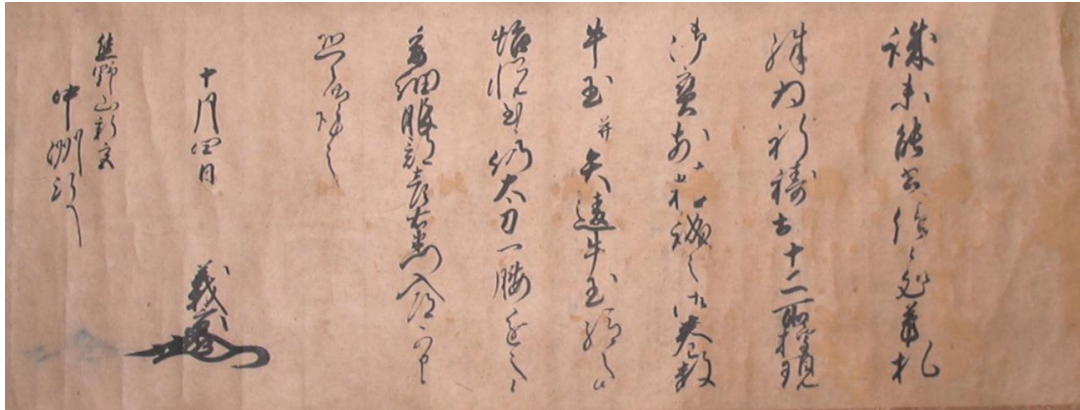
[地図](#)  
[表](#) 戻る



上杉氏の譜代で栃尾城主であった本庄宗緩（<sup>さねより</sup>実乃）の寺院宛文書です。花押の形態や文中「御屋形様」（<sup>おやかたさま</sup>上杉輝虎、のちの謙信）の表記から、永禄年間（1558～1569）のうち、輝虎が春日山城を不在にしていた頃の書状とされ、また本文・花押とも同じ墨色なので自筆と考えられます。

実相院は、慶長16年（1611）の頃まで、能生白山大権現の別当<sup>べっとう</sup>として神領を支配していました。本書を含む中世文書がなぜ同寺に伝来したのか、その詳細は不明です。

あさくら よしかげしよじょう  
朝倉義景書状



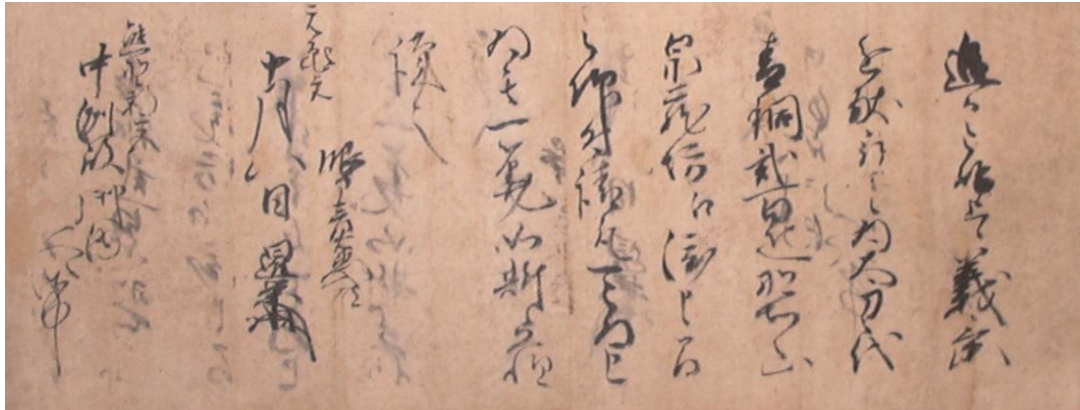
- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1点
- ・ 大きさ 縦16.5cm横43cm
- ・ 所有者 実相院
- ・ 管理者

[地図](#) [表](#) 戻る



朝倉義景は越前国（福井県）一乗谷の戦国大名で、元亀元年（1570）4月、浅井長政と連合して、近江国（滋賀県）姉川で織田信長・徳川家康軍と戦い大敗しました。本書は、義景が熊野新宮社の社人に、御師（<sup>おし</sup>祈祷師）泉蔵坊を通して祈祷を依頼し、その報告と2種の護符（<sup>ごおうほういん</sup>牛王宝印）を受け取った返礼として、太刀料銅銭2貫を献納した、という内容です。戦国領主間ではしばしば、誓約文の料紙として牛王宝印が使用されました。朝倉氏の熊野信仰とともに牛王宝印流通の様相を示す貴重な資料です。

はっとりせんえいそえじょう  
服部暹栄副状



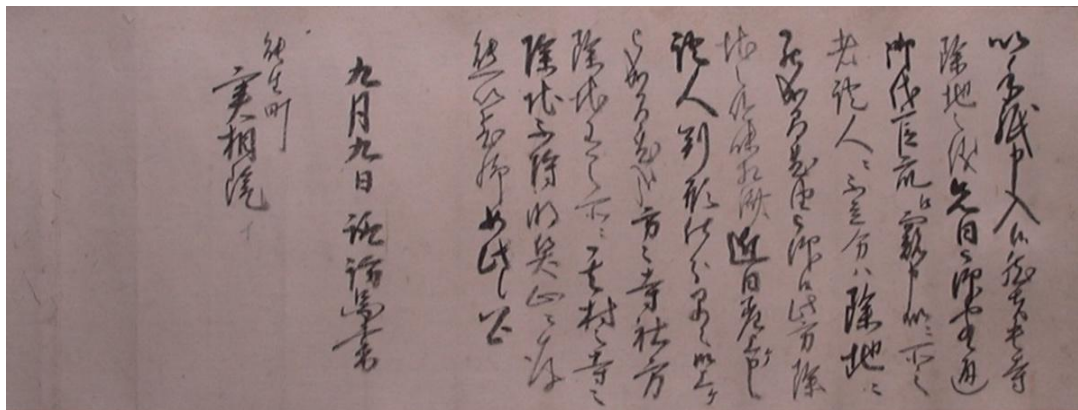
- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1点
- ・ 大きさ 縦14.8cm横36.5cm
- ・ 所有者 実相院
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る



[朝倉義景書状](#)に添えて奉行人である服部暹栄（彦右衛門）が熊野新宮社へ出した副状です。

す わ ず しょしょうじょう  
諏訪図書証状

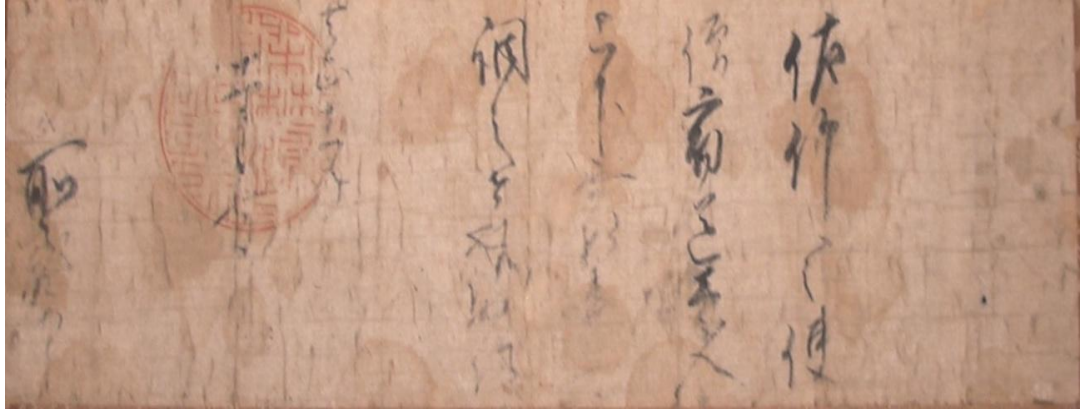


- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1点
- ・ 所有者 実相院
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸



高田藩主松平光長は天和元年（1681）の越後騒動のため改易となり、領地はすべて幕府に没収され、翌年には、幕府による遺領全域の検地「天和検地」が行われました。当地方を担当した検地奉行は、信州（長野県）高嶋藩主諏訪因幡守忠晴の家老の諏訪図書盛政でした。本書は、実相院が検地奉行に出した除地願に対する返答書であり、当時の寺社領や除地（免租地）はもちろん、土地管理のあり方などを伝える資料といえます。

うえすぎかげかつ か しょ  
上杉景勝過書



- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1点
- ・ 大きさ 縦13.4cm横41.2cm
- ・ 所有者 実相院
- ・ 管理者

[地図表](#) 戻る

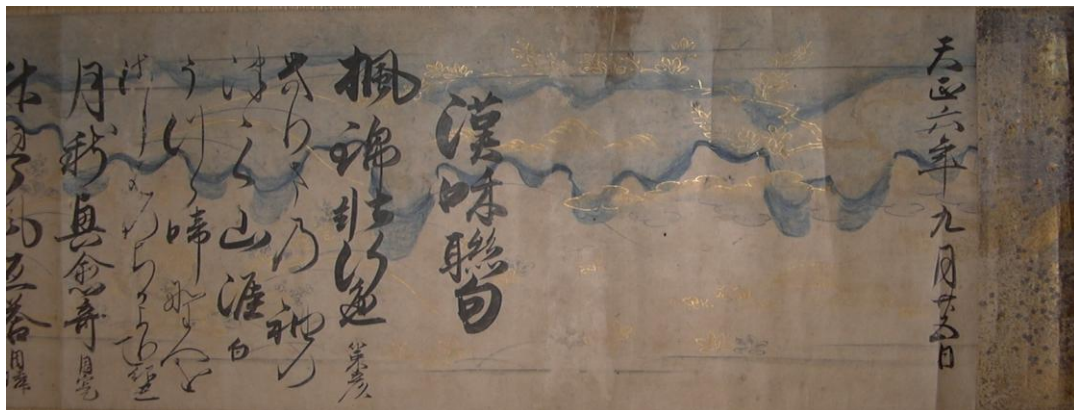


「<sup>かしょ</sup>過書」とは関所通過の許可書および関所免除の証文のことです。文中の「佐竹」とは、常陸（茨城県）太田城主佐竹義重のことであり、北条氏や陸奥の伊達氏らに対抗し、上杉謙信、景勝とも盟を結び、その交渉には僧侶や修験僧があたったようです。

本書に<sup>お</sup>捺されている朱印は、天正11年（1583）11月の「柏崎宛て朱印状」（長岡市立中央図書館所蔵文書）のものと同じで、「<sup>でんま やどおくりなびにまかないとう</sup>伝馬宿送并賄等」があったことをうかがうことができます。

かんわ れんくしょうしつ

## 漢和連句昌叱筆



- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1巻
- ・ 長さ・巾 445cm・19cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 安土桃山

[地図表](#) 戻る



この連句は天正6年（1578）9月25日の句会のもので、昌叱とは桃山時代の連歌師で、本名は里村弥三郎なおかげ仍景といい、また別号を策庵ともいいます。豊臣秀吉に仕え法橋ほっきょう（僧位の一つで法眼ほうがんの次）に叙せられ、文禄4年（1595）には百石ひゃっこくの知行ちぎょうを受け、「花の本」の称号も得ています。

「連歌」は「和歌」を母体として発生し、近世の俳諧へと続いてきた日本独特の詩形態で、中世に盛んに行われたことを物語る資料の一つです。

ご こう ぎ ご よう ども  
御公儀御用留



- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 36冊
- ・ 所有者 糸魚川市教育委員会
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図](#) [表](#) 戻る



この御用留は能生谷榎村の<sup>おおきもいり</sup>大肝煎であった伊藤家が代々記したもので、寛保2年（1742）から文化11年（1814）までの70余年間の領主からの<sup>ふれがき</sup>触書・<sup>かいしよ</sup>廻書および能生谷の村々の出来事が記されています。

「御用留」とは領主からの<sup>かいじょう</sup>触書、廻状を書留め、村々からの願<sup>うかがいしよ</sup>届、伺書控えた江戸時代の地方帳簿の一つです。大肝煎は廻状や触書を受取り、それを御用留に書き写したのち、支配下（組）の村々に廻していました。

御用留の年号

寛保2年(1742)

延享2,3,4,5年(1745～1748)

寛延2,3年(1749～1750)

宝暦2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14年(1752～1764)

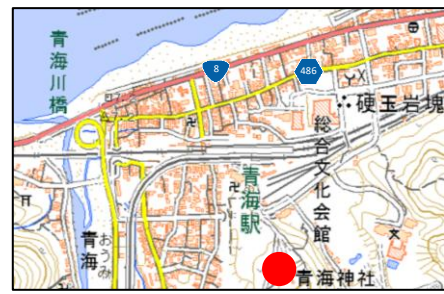
明和2,3,4,,5,6,7,8,9年(1765～1772)

安永2,3,4,5,6,7,10年(1773～1781)

文化11年(1814)

てんじんやまひめづかきょうづかしゅつどひん

## 天神山姫塚経塚出土品



- ・ 指定日 昭和37年3月29日
- ・ 所在地 青海
- ・ 員数 4点
- ・ 陶製経筒 高さ25cm口径20cm
- ・ 所有者 青海神社
- ・ 管理者 糸魚川市
- ・ 時代 平安

[地図表](#) 戻る



住宅等の造成に伴って大正8年（1919）に青海字石垣、青海神社裏手の天神山の姫塚より発見され、青海神社へ奉納された経塚出土品で、陶製経筒1点、銅製草花双雀文鏡2面、銅製周縁1点から成ります。珠洲焼の経筒は円筒状を呈し、仁安2年（1167）の奉納が刻銘でわかります。製作年代が明確な数少ない陶器（珠洲焼）の一つであり、出土地の北側には古代・中世の遺物を出土する上野遺跡も立地することから、当地方の古代末期の様相を物語る遺物です。

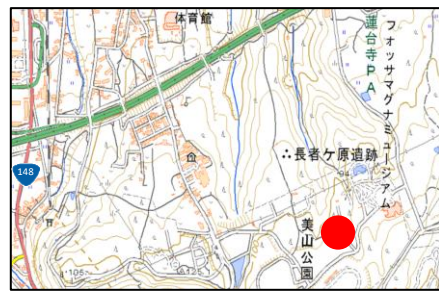
告奉正私

願主僧定禰（花押）

粟田重包

仁安貳年七月十四日申時了

ちょうじゃ が はらしゅつど いぶつ  
長者ヶ原出土遺物



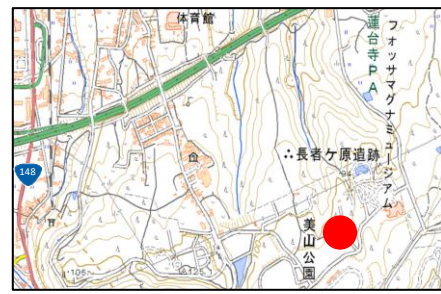
- ・ 指定日 昭和46年3月26日
- ・ 所在地 一ノ宮
- ・ 員数 50点
- ・ 所有者 糸魚川市教育委員会
- ・ 管理者

[地図](#)  
[表](#) 戻る



長者ヶ原遺跡の中央部を対象とした昭和29・31・33年(1954・56・58)、1～3次調査の出土品の一部で、縄文時代中期の土器群、大珠製作資料、土偶などから成ります。これらの遺物は、遺跡中央部に営まれた集落跡の年代、硬玉製大珠や蛇紋岩製磨製石斧の製作、周辺地域との交易、集落で行われた祭祀などといった北陸屈指の規模を誇る集落跡の特徴を如実に示すことから、当地方の縄文時代や翡翠文化を研究する上で不可欠な資料です。

ふかばち じんぶつもん  
深鉢 (人物文)



女性



男性

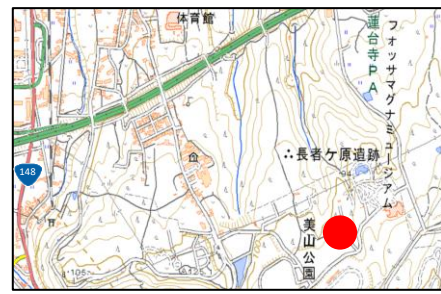
- ・ 指定日 昭和63年4月21日
- ・ 所在地 一ノ宮
- ・ 員数 1口
- ・ 大きさ 高さ22cm □径36cm
- ・ 所有者 糸魚川市教育委員会
- ・ 管理者
- ・ 時代 縄文

[地図](#) [表](#) 戻る



県立海洋高校の北側に広がる井の上遺跡より出土した縄文時代中期の深鉢で、昭和60年（1985）の能生町史編纂に伴う発掘調査で出土しました。胴部下半を欠くものの、器面には縄文が施され、粘土紐を貼り付けた隆帯<sup>りゅうたい</sup>によって手足を広げた大の字の男女一対が描かれています。縄文土器にはさまざまな文様が描かれますが、性器や乳房の描写から性別が判別できるほど明瞭な人を描いた文様は非常に稀です。

こうぎょくせいいたいしゅ  
硬玉製大珠



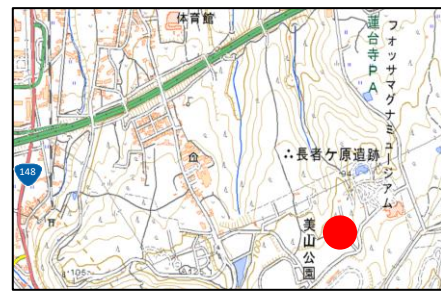
- ・ 指定日 昭和63年4月21日
- ・ 所在地 一ノ宮
- ・ 員数 1個
- ・ 所有者 糸魚川市教育委員会
- ・ 管理者
- ・ 時代 縄文

[地図](#)  
[表](#) 戻る



たいしゅ  
大珠とは長さ3cmを超える大きな玉（装身具）で、縄文時代中期に当地方で作られ各地の拠点集落に威信財として流通しました。この硬玉製大珠は、県立海洋高校の北側に広がり、能生川流域屈指の規模と推定される井の上遺跡より採集された大珠の未成品で、孔は貫通していますが研磨による整形は不十分です。この遺跡からは硬玉原石や大珠未成品なども数多く出土していることから、硬玉などを用いた大珠製作遺跡であることは明確で、縄文時代中期における硬玉製大珠の製作といった当地方の特色を如実に語る遺物です。

てらじ いせきしゅつど ひん  
寺地遺跡出土品



- ・ 指定日 平成26年3月25日
- ・ 所在地 一ノ宮
- ・ 員数 262点
- ・ 所有者 糸魚川市
- ・ 管理者
- ・ 時代 縄文

[地図](#)  
[表](#) 戻る

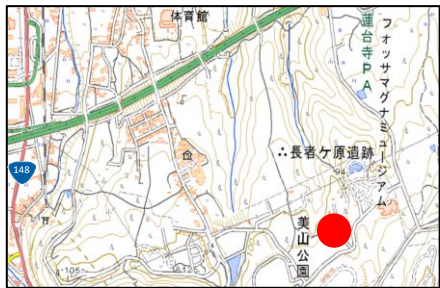


本遺跡で検出された縄文時代中期と晩期の遺物で特に注目されるのは、ヒスイ・蛇紋岩じゃもんがんを主体とした各種玉類と磨製石斧ませいせきふの生産です。

ヒスイ製玉類は神秘的な色彩から、蛇紋岩製磨製石斧じゃもんがんせい ませいせきふは強固な石材による優位性から広範囲の流通が確認されています。

縄文時代における希少な石器・石製品の製作工程が、中期及び晩期で復元できる本遺跡出土品は、学術的価値が高く重要です。

たぶせたまつくりいせきしゅつどひん  
**田伏玉作遺跡出土品**



- ・ 指定日 令和2年3月27日
- ・ 所在地 一ノ宮
- ・ 員数 210点
- ・ 所有者 糸魚川市
- ・ 管理者
- ・ 時代 古墳

[地図表](#) 戻る



田伏玉作遺跡は、昭和39（1964）年当時の国鉄北陸本線工事に発見された遺跡で田伏奴奈川神社の西隣に位置しています。昭和45（1970）年に発掘調査が実施され、古墳時代中期～後期の玉作遺跡と確認されています。

発掘調査では、工房跡は確認されませんでした。滑石製の臼玉・管玉・勾玉の成品、未成品のほか、原石や砥石などの工具が出土しました。これらの出土品は古墳時代中～後期における玉類の製作工程をたどることができる貴重な資料です。

むらやまぐん き  
村山軍旗



- ・ 指定日 昭和47年5月12日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 1旒
- ・ 大きさ 縦98cm横78cm
- ・ 所有者 糸魚川市教育委員会
- ・ 管理者

[地図](#) [表](#) 戻る



村山氏は北信濃（長野県須坂市）を発祥とする名族で、南北朝時代の騒乱の恩賞として、建武元年（1334）に徳合城とくあいを本拠とする当地の所領を得、のち徳合城主であった村山安芸守あきのかみが没する天文4年（1535）まで、当地を治めていました。

この軍旗は村山氏が合戦時に使用したもので、徳合村中村集落にある菩提寺、曹洞宗宝昌寺に伝えられた什物じゅうもつのひとつです。羽二重ふたいに紅く「勇」の文字が染め抜かれていて、中世村山氏を示す関係遺品として大変貴重です。

どうせいわにぐち  
銅製鰐口



- ・ 指定日 昭和49年4月16日
  - ・ 所在地 青海
  - ・ 員数 1個
  - ・ 面径・厚さ 17cm・4cm
- ・ 所有者 七社神明社  
・ 管理者 糸魚川市

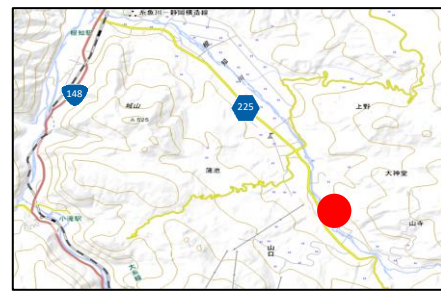
[地図](#)  
[表](#) 戻る



「鰐口」は拝殿やお堂の前の軒に吊るして参拝者が神仏に來意を告げるための平たくて大きな鳴具（鈴）です。この鰐口は青海川上流にあった橋立集落の地藏堂に伝わったもので、刻銘からは永正15年（1518）に竹花□□によって奉納されたことが読み取れ、橋立集落成立の古さはもちろん、中世期における当地方の呼称や行政区分を知り得る数少ない遺品です。

奉蔵地 越後国西浜沼川保内橋立村 永正十五年戌刁  
四月廿四日 竹花□□

えい わ ぼ とう  
永和の墓塔



- ・ 指定日 昭和55年4月22日
- ・ 所在地 山寺
- ・ 員数 1基
- ・ 大きさ 縦87cm横33cm
- ・ 所有者 金蔵院
- ・ 管理者
- ・ 時代 室町

[地図](#)  
[表](#) 戻る



根知山寺の金蔵院境内にある花崗岩<sup>かこうがん</sup>の石塔で、旧千手院墓地から掘り出されたものです。風化の著しい碑面には次の文面を読み取ることができます。

永和二年 妙安

南無阿弥陀佛

五月二日 敬白

永和2年（1376）の北朝年号は市内に残る墓塔としては最古であり、当地が北朝（室町幕府）の支配下にあったことを示すとともに、中世に隆盛した大規模な寺院とされる千手院はもちろん、山城跡を多く残す根知谷の歴史を知る上で貴重な資料です。

しょうきょう いたび  
正慶の板碑



- ・ 指定日 昭和55年4月22日
- ・ 所在地 上刈5丁目
- ・ 員数 2面
- ・ 大きさ ①縦40.0cm横18.5cm厚さ1.7cm  
②縦22.5cm横13.2cm厚さ1.7cm
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者

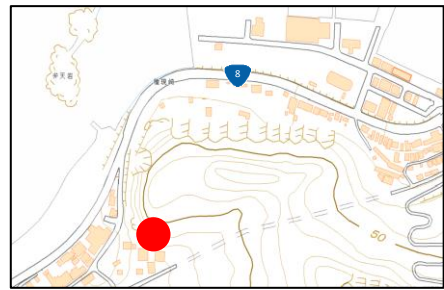
[地図](#)  
[表](#) 戻る



早川右岸の不動山城主で、上杉一族の山本寺氏<sup>さんぼんじ</sup>に仕えた伴家の火葬場（不動山城の麓）から出土したとされる板碑で、当地では産出しない緑泥片岩を用いています。2面とも著しく欠損していますが、①は阿彌陀如来の種子<sup>しゅじ</sup>（梵字<sup>ぼんじ</sup>）を刻み、②は蓮華と正慶2年（1333）の北朝年号があることから、南北朝時代のものと考えられます。正慶2年の北朝年号は市内に残る金石文としては最古であり、板碑の類例がない当地において、不動山城や早川谷の歴史はもちろん、こうした板碑を盛んに用いた関東方面との交流を知る上でも参考になる資料です。

むなふだ

# 棟札



表



裏

- ・ 指定日 昭和59年5月29日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 1枚
- ・ 大きさ 縦69cm横14.5cm
- ・ 所有者 白山神社
- ・ 管理者 白山神社文化財保存会
- ・ 時代 室町

[地図](#) [表](#) [戻る](#)



能生の白山神社の東方には、かつて御剣大権現、おおなむちのみこと大己貴命、本地不動明王をまつ祀る剣社があったとされています。これは、その剣社の造立に関わる文亀3年（1503）の棟札で、表・裏には次のような墨書があります。

(表) 小工宗次  
 一山大衆等同心並神主管原朝臣宗繼  
 理観坊 快春  
 奉造立劔御前壱間四面宝殿 文亀三癸亥五月六日

(裏)

出銭衆	理観坊	一貫五百文	密乗院	二百文
	宝楽坊	十疋	金剛院	五十匁
	五郎兵衛女	百疋	神主	三百匁
	妙西	三十疋	高善善之	三十疋

じんぐう じ どうぞうやく し によらい ざ ぞう  
神宮寺銅造薬師如来坐像



- ・ 指定日 平成19年3月20日
- ・ 所在地 一の宮1丁目
- ・ 員数 1軀
- ・ 像高 21.3cm
- ・ 所有者 糸魚川市
- ・ 管理者 糸魚川市教育委員会
- ・ 時代 室町

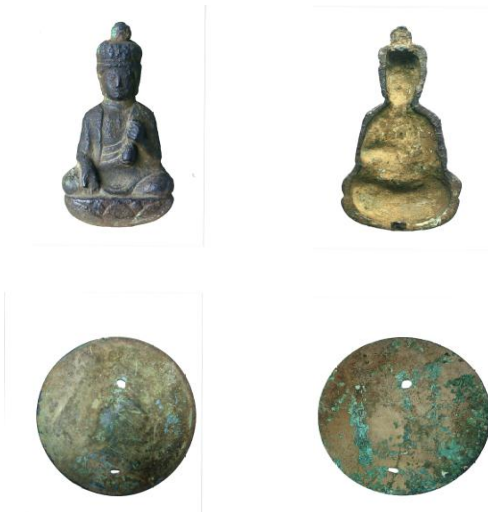
[地図表](#) 戻る



本像は一の宮高峯山教王院神宮寺じんぐうじの仏像で、明治初年、廃仏毀釈はいぶつぎによって廃寺となった後、法主であった一宮家いちみやに伝わったものです。像の背面にある「永□□ 嘉吉三年（1443）三月七日 道心」の刻銘から、室町時代中期に糸魚川で造られたことがわかり、小型で、背面に三つの柄穴ぼぞがあることから、懸仏の可能性も考えられます。一の宮神宮寺は、その歴史・規模から糸魚川地方の代表的な寺院であったとされ、本像はその神宮寺の歴史、信仰や工芸の歴史を知る上で貴重な遺品です。

新潟県加茂市の和泉山谷泉寺こくせんじの鑄造阿弥陀如来立像の銘には「嘉吉三年三月七日 越後国布河庄糸魚河奉造立□□永□大旦那四良左衛門法名浄信□□」とあり、作風も類似することから同時に造られたと考えられています。

ひ うち やま さん ちょう しゅ つ ど ひん  
火打山山頂出土品



表

裏

- ・ 指定日 平成26年6月26日
- ・ 所在地 能生
- ・ 員数 仏像1軀 鏡面1枚
- ・ 所有者 仏像 宗教法人白山神社
- ・ 管理者 鏡面 糸魚川市教育委員会

[地図](#)  
[表](#) 戻る

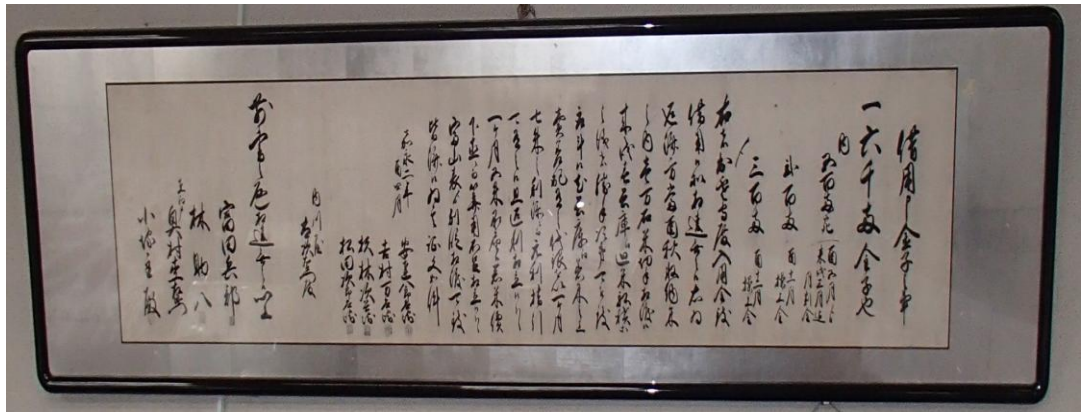


仏像は像高11.5cm、銅製の十一面観音で、火打山山頂付近からの出土品です。陰影は浅く簡略された造形を呈することから、遡っても15世紀代の製作と推察されます。

鏡面も同山頂付近より採集されたもので、直径17cmの銅板で二対の小孔が開けられ仏像を固定したホゾ孔は「能生白山 御正躰 文□五年六月 日 勸進僧實意」の刻銘の後に開けられている。製作年代は刻銘の痕跡から「文永五年（1268）」あるいはそれ以前と判断でき、その後に仏像を取り付けて奉納されたと理解できます。

仏像と鏡面は製作年代も異なり、大きさ等も微妙に異なることから別の懸仏ですが、13世紀後半から15世紀代に火打山山頂付近に埋納された懸仏の一部であり、能生白山神社の信仰領域とその隆盛はもちろん、中世における当地の山岳信仰を知るうえで重要な歴史的資料と言えます。

まえだ いずものかみきん す しゃくようしょう  
前田出雲守金子借用証



- ・ 指定日 令和元年12月25日
- ・ 所在地 梶屋敷
- ・ 員数 1通
- ・ 所有者 個人
- ・ 管理者
- ・ 時代 江戸

[地図表](#) 戻る



嘉永二年（1849）四月、富山藩主出雲守が青海村で廻船業を営む内川屋から六千両を借り受けた借用証です。富山藩主に高田藩所領地の内川屋が六千両という大金を融資した内容が記載されており、当時の市内廻船業の隆盛がうかがい知ることができるとともに、当時、他藩の廻船業者から融資を受けざるを得なかった富山藩の財政困窮状況を裏付ける文書です。また、この文書が当時の借用証の書式を呈しており、内川屋にこの借用証が残されていることから、富山藩から返済がなかったことの証と考えられる貴重な史料です。